お力の身の上のその一條は、一齋の孫のことからヒントを得たものであらう。

七

『にごりえ』には、蒲團屋の源七の佗住居が巧に描寫されて居るのであるが、一葉女史の『よもぎふにつ記』の十二月二十七日（明治二十五年）のところに、

『歸路かねての心組に曉月夜の原稿料十圓のつもりなりしを思ふに越えたれば、彼の稻葉の穗並風にもまれて枯々なるも哀なるに昔は我も睦びし人の、是よりは何ごとも賴まねど、流石に仇の間に非ず、理を推せば五本の指の血筋ならねど、さりとておなじ乳房にすがりし身の言はゞ姉ともいふべきを、いでや喜びは諸共にとて柳町の裏屋に貧苦の體を見舞ひて金子少し歲暮にやる、昔は三千石の姫と呼ばれて白き肌に綾羅を斷たざりし人の髮は唯枯れ野の薄の樣にて何時取りあげけん油氣もあらず、袖無しの羽織見すぼらしげに着て、流石に我れを恥ぢればにやうつむき勝に、さても見苦しき住居にて茶を參らせんも中々に無禮なればとて、打詫るぞことに涙の種なり、疊は六疊ばかりにて切れもきれたり唯藁埃の樣なるに、障子は一處として紙の續きたる處もなく、見し昔の形見と殘るものは卯の毛におく露ほどもなし、夜具蒲團もなかるべし手道具もなかるべし、淺ましき形の火桶に土瓶かけて、小鍋だての面影何處にかある、あるじは是れより仕事に出る處とて、筒袖の法被肌寒げにあんかを抱きて夜食の膳に向ひ居るもはかなし、正朔君の我が土產を喜びて紅葉の樣な手に持しまゝ少時も放たず、御佛前に御覽に入給へと母君に言はれて佛壇めきたる處に供ふ、何事も時世にて又廻りくる春もあらんを正朔君だに斯くてあらば夢力を落して給ふな、かよはき御身に胸を痛めて病氣など起し給はゞ、それこそ取り返しのあることならねばと慰むるに、聞き給へ此子の成長くならば陸軍の技師になりて銀行より幾らも金を持ち來りて、父も母も安樂にすぐさせんと常々威張りて申すことと流石に賴もし氣に笑みて語る、又こそとて此家を出れば夕風袂に吹きて大路既に闇くなりぬ』

とある。こればかりを粉本にして、源七の佗住居を書いたのではなからうが、こ

れが幾らかの助けになつたことは、疑ひがなからう。同じ源七の佗住居のところでは、源七の妻のお初が蟬表の内職をやつて居るのが描いてある。蟬表とは下駄の籐表のことである。夏、蟬の鳴くころから使ふといふので蟬表といふのださうである。これは二十五年頃、邦子君がやつて居た内職である。日記中の『わか草』といふ部の八月三日（二十四年）のところに、

『國子當時蟬表職中一の手利に成たりと風説あり。今宵は例より酒旨しとて母君大ひに酔ひ給ひぬ』

とあり、又『蓬生日記』の十月二十三日（明治二十四年）のところには、

『新平參る、國子の蟬表得まほしと様に云へばやがて二つばかり賣る、百足ばかりもて來し内にかばかりのは又なしなどいふ、我身の歌とくらべられんにいかにかせまし穴にも入らまほしうこそ』

とあり、それから、二十五年四月頃になると、一葉女史自身も蟬表を作つたものと見えて、日記の四月の部に、

『十日より蟬表内職にかゝる。』

十一日　おなじく。

十二日　おなじく』

とあるのである、

結城朝之助の粉本は大部は半井桃水氏であらうと思ふのであるが、一葉女史が或る時、『隣りへ遊びに來る立派な人があるのだが、皆なに馬鹿野郎などと云はれながら、平氣で、池の中に入つて、ざぶ〳〵鯉などを追ひ廻して居る』と話したことがある。そんな事もモデルの一部になつて居るのであらう。

『にごりえ』の中にある源七とお力が心中したお寺の山といふのは傳通院の裏山のことである。今は人家が建て連つて居るのであるが、明治二十七八年頃は傳通院の裏手は藪や草原になつて居て、淋しい所であつたのだ。

大正五年であつたか、眞山青果君が伊井河合一座のために『にごりえ』を脚本にしようと企てたことがある。その時に眞山君は彼の邊にお寺があるか何うか見て來

ようと思ふといふ話であつたので、僕はそれは傳通院の裏山なのだと説明した。眞山君が『お寺の山』といふのを直ぐに傳通院の裏山と心付かなかたのは、僕に取つては少し意外な感じがしたのであつたが、更に考へて見ると、眞山君の方が尤もであつたのだ。一葉女史時代の東京は吾等老人の徒にこそ意味はあるのだが、眞山君あたりとは更に交渉のないものであるのだ。

一葉女史の日記中には、おぶんといふ女に惑溺した小宮山庄司といふ甲州人のことが方々に出て居る。今にして思へば、その男の事であつたらうと思ひ當るやうな話を一葉女史から聞いたことがある。お力に惑溺した源七の心持を描くには、その小宮山の樋口家で或る時したらしい告白が餘程參考になつたのではなからうかと推測せられる。

「にごりえ」になる迄

一

故樋口一葉女史作の小説『にごりえ』が脚色されて、此の十日から、歌舞伎座で上場されてゐる。

それで、『にごりえ』に描かれた土地、人物のモデル等に就て、僕の知つて居るところ、傳聞したところを、此處に記さうと思ふ。劇を鑑賞する上に何等かの助になるのであつたら本懐である。

土地は本郷の丸山福山町附近である。巣鴨線の小石川春日町の次には電車は小石

川の初音町で止まるのだが、その少し先へ行くと、右へ曲る横町がある。その横町は卅間と行かないうちに西片町の崖下へ突き當つて、左へ曲つて居る。その邊りからの左側が丸山福山町である。

『にごりえ』にはその邊りを新開と呼んで居る。

彼の邊りからして、白山下の方へかけては僕等の十四五の時分までは水田であつた。彼の邊りが埋立てられて町をなし始めたのは明治廿年頃からでは無かつたらうかと思ふ。

それは兎に角、一葉女史が大音寺前から丸山福山町へ移つた明治廿七年では、未だ新開の心持が土地に十分殘つて居たのである。

で、その時分は、此の福山町及びその附近に限らず、何處でも新開となりさへすれば大抵必ず出來る一種の商賣屋があつた。それは、『にごりえ』に所謂、

『軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壕か何か知らず銘酒あまた棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騷がしく、女主が手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し賴みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切もをかしかるべく、女ならぬお客樣は手前店へお出かけを願ひますともいふにかたからん、世は御方便や商賣がらを心得て口取り燒肴とあつらへに來る田舍ものもあらざりき』

二

といふやうな家であつた。が、それは未だ上の部で、それよりずつと簡單な店がかりの家も多かつた。

田を埋め、畑を潰して、家が建つ、すると、其所へ上記のやうな商賣屋が出來る、人が寄つて來る、周圍に並の町家が出來て來る、町の形がだん〳〵整つて來る、何時の間にか、ヘンな商賣屋の數が減る、やがて、全く並の町になつて了うといふ順序であつたのだ。

さながら、或時期を限つて、それ等の商賣屋は默許されて、やがて土地を開くといふその任務を終つて了うと、又さういふ家のある必要を生じた他の場所へ移つて行くとでもいふやうな觀があつた。

一葉女史の住居は福山町四番地であつた。所で、その位置を說明するには、今の電車路の方からの道筋に依るのが一番分り易い。柳町の停留所から北行すると、最初の右の方の角は活動小屋で、それからもう一つ先に少し廣い横町がある。その左角は小さい洋館建の銀行である。で、その横町を右へ曲つて行くと、その突き當りから少し左へ行つたところの右側は大溝で、それに小さな橋が架かつて居る。その裏の突き當りに今不動堂か何かゞあるのだが、其處に明治四十三年頃までは、一葉女史の住まつた家——女史終焉の家——が立つて居たのである。

前に云つたやうな商賣屋は、今活動小屋の横町になつて居るあたり——その當時はホンの拔け裏であつたのが——から、女史の住居の前あたりまでを中心にして居たやうであつた。

今銀行の横町になつて居る町の、福山町の通になつての右角の家には確か紅葉亭といふ行燈が出て居た。

一葉女史の住居への入り口の向つて右手に平家があつた。此の家は現存して居る。『にごりえ』の菊の井の基礎になつたのは此の家である。

三

此の家は、今は大溝（おほどぶ）を家の横に取つて立つて居る形になつて居るのであるが、如上の商賣屋であつた時分には、大溝の方が店の正面になつて居て、大溝の上をば店の正面一杯に板で蓋をして、其處から並の客は上るやうになつて居た。尤も、今その家の門になつて居るところ、卽ち、家の向つて右手は、その當時も矢張り今の通りであつて、その右の柱には、一葉女史の書いた『御料理仕出し仕り候』といふ聯（れん）の看板が懸つて居た。

その家はその家の者の姓をその儘鈴木亭と云つて居たさうである。

その鈴木亭にお留といふ女が居た。年齢は二十二三らしかつた。非常な好い器量といふのでは無かつたが、何とも云へぬ心持の好い女であつたといふのだ。爽快な感じのする女とでもいふのであつたらしい。

一葉女史の『日記』中にある『忍ぶ草』といふのゝ中に、左の如き條がある。

『となりに酒うる家あり、女子あまた居て客のとぎをする事うたひめのごとく遊びめに似たり、つねに文かきて給はれとてわがもとにも來る、ぬしはいつもかはりてそのかずはかりがたし。

まろびあふはちすの露のたまさかは
誠にそまる色もありつや』

『隣に居た女が客へ出す文を書いて呉れと云つて來たから、書いてやつたら、ひどく氣に入つたと見えて、その女が數寄屋町へ出てからも、車でわざ〳〵賴みに來る』

といふやうな話を一葉女史から僕は聞いたことがある。廿八年の七月頃かと思ふが、女史は『面白い女があるから、「放れ駒」といふのを書かうと思ふ』と云つて居た。

お留は、赤坂に居たと云つて居たさうである。けれども、藝者になつて居たのか何うだか不明である。それでも、下谷の藝者になつたといふのだから、糸道は明いて居たのであらう。

四

福山町あたりのさういふ家でも、三味線を引いて客を樂しますことは、少くとも默許されて居たらしかつたのだ。

お留は數寄屋町に居るうちに、新派の下廻りどころの者と深く契つて、行くところを知らずなつて了つたさうである。

そのお留が菊の井のお力のモデルだといふことである。

思ふに、『放れ駒』の女といふのもお留であつて、『放れ駒』が『にごりえ』となつ

たのであらう。最初の表題を後で變へることは誰もやることであるやうに、一葉女史も最初の表題を後で變へたことは時々はあるらしい。現に樋口家に保存されて居る諸作の下書の中で、『たけくらべ』の第一章が『雛鶴』といふ題で書いてあるのを見たことがある。

一葉女史の書いた看板の所在は、鈴木亭が彼の家を去つた後で、樋口家の人々が捜索したのであるが、鈴木亭の女主は一時田端に住まつて居てから、田舍へ引つ込んで了つたとかいふので、看板の所在は遂に分ら無かつた。

結城朝之助のモデルは誰であらうか。僕は一葉女史の小説を書くことの謂はば手ほどきの師であつた半井桃水氏だと思ふ。

『日記』の中に在る半井氏に對する一葉女史の描寫と、『にごりえ』の中の朝之助に對する描寫との間に、種々の一致點のあることは、誰にでも分ることである。

『隣りの家へ遊びに來る客で、一人却々立派な人品の人がある。家の者に馬鹿野郎、馬鹿野郎などゝからかはれながら、平氣で笑ひながら池へ入つて鯉を追つ掛けなどして居る』と一葉女史が話したことがある。これも朝之助のモデルの一部であらう。

お力が自分の祖父は學者であつたと朝之助に話すところがある。

佐藤一齋の孫に當る者が指ケ谷町寄りの方で、銘酒屋をやつて居て、其處に一齋の書いた額が懸つて居るので、それを見に行く客があつたといふ噂があつた。尤も一葉女史が福山町へ越した時分には最早その家は無くなつて居たさうである。

お力の祖父の話はそれから取つたのであらうと思はれる。

五

蒲團屋の源七のモデルに就ては、未だ調べて見無いから十分には分ら無い。

唯だ幾らか關係があらうかと思ふのは、日記の中に散見する甲府人小宮山某の事である。小宮山はお文といふ女に迷つて妻子を捨てた男である。源七の惑溺の心持を書くのに、小宮山の物語りが餘程助けをなしたことは疑が無いと思ふ。

お初のモデルもまだ判然し無い。けれども、源七の住家の描寫の基礎になつたと

思はれる事柄は日記の中にある。

一葉女史の父君則義氏と母君瀧子氏は共に甲州の鹽山の奥の大藤村の人であつたが、安政年間志を立てゝ江戸に出で、則義氏は幕府旗下の士菊地家に、瀧子氏の方は同じく稲葉家に奉公し、後同心の株を買つて、八丁堀衆に加り、明治になつてから、東京府の役人になつたのであるが、稲葉家の娘孝子といふ人とその夫とが、甚しく窮乏して居ることが、日記の諸所で窺はれる。

所で、一葉女史は、明治廿五年の十二月廿七日の夕方に、柳町の裏店に住んで居た稲葉家の人々を訪うて、『曉月夜』の稿料の中から幾らかの歳暮をやつたことが『よもぎふにつ記』の中に出て居る。

その時の觀察が源七の佗び住居を組み立てる材料の一部に用ゐられたことは、確であらうと思ふ。

源七の住家で女房のお初がやつて居る内職は蟬表だとある。蟬表とは下駄の籐表のことである。夏下駄になるのだから、それで蟬表と稱へるのださうだ。

此れは、日記に據ると、明治廿四年頃に妹さんの邦子氏がやつて居る内職である。明治廿五年五月の日記に據ると、一葉女史自身も少しやつてみたのでは無からうかとも思はれる。

『にごりえ』といふ題名は、庭前の池から思ひ付いた點もあらう。如何にも池の多いところであつた。鈴木亭の庭にもあつたのみならず、一葉女史の家の後、即ち、北裏も池になつて居た。一葉女史の家はさながらに水亭のやうな形になつて居たのである。『日記水の上』に據ると、女史の住居は、元は守喜といふ鰻屋の離居であつたといふ、母屋は恐らく鈴木亭になつてゐた家であつたのであらう。

所で、『にごりえ』を讀む人々は、お力が源七に對して戀になつてゐたのであらうか、何うかといふ點に、一寸と頭を傾げやうかと思はれるが、此れは一言では云ひ盡せ無いことのやうに思ふ。或る程度の戀はあつたとしたところで、さういふ情は源七に對する氣の毒とか可哀さうとかいふやうな憐愍、同情の念がその中の大切な基礎になつて居ることは疑が無い。お力の性格、感情に一葉女史の主觀が可なり多

分に加はつて居ることは勿論であるから、日記中諸所に表はれて居る一葉女史の男に對する感情が、お力の源七に對する感情の基礎になつて居ることは確かであらう。

お力の役は、此の點に注意して演じ無ければいかぬと思ふ。お力が小春で源七が治兵衛になつて了つては駄目である。

都新聞に據ると、僕は歌舞伎座の稽古場へ毎日通つて、一葉女史が『にごりえ』を書いた當時の女史の心持とやらを講演して居たさうである。

けれども、僕は本月六日に招かれて本讀(ほんよみ)の一部を聞きに行き、十日に初日の具合を見て呉れと云はれて見に行つたのみであるし、僕は毎日講演する程『にごりえ』に關する材料は持つて居ない。それに、何んぼ僕が學校の教師だからと云つて、何處へ行つても講演ばかりやる譯では無い。

「たけくらべ」の跡

一

久保田万太郎君が一葉研究――『たけくらべ』研究――を公にするに就ては、大音寺前――下谷龍泉寺町あたりの案内をしろといふ依頼を同君から受けてゐたが、その日取りもいよ〳〵十六日の午後と極まつて、二時少し前、一行五人で出發した。

大音寺前だけ見れば、さし當つては、それでいゝといふのであつたけれども、殆ど途すがらに當るので、本郷丸山福山町の一葉終焉の家の近邊――『濁り江』のシインになつてゐるあたりを通つて行くことにした。

春日町から白山の方へ向けて行く電車通りを北行して、柳町あたりの右側にある活動小屋の先の銀行の角を右へ曲り、突き當つて、左へ一二間歩いたところの大溝を隔てた山沿ひの家の一つが、一葉の故宅であつた。溝に沿ふて側面を見せてゐる平家が『濁り江』の菊の井のモデルになつた鈴木亭といふ小料理であつた家である。此の頃では裏の方へ建増しができて居るけれども、溝沿ひの部分は家の形は昔と少しも變つてゐない。その家の左に橋がかゝつてゐるのだが、それを渡つて突當りにある豐川稲荷の勸請所になつて居る家の立つて居るところが、昔の一葉の故宅の位置である。

元の家は、明治三十六年頃から森田草平君が住んでゐたことがあるのだが、四十三年八月十日頃に降り續いた大雨のために、山の崖が崩れて、家はさん〴〵に破れてしまつたのだ。森田君はもう少しで押し潰されるところであつたといつて、夜半に家が潰れた時の話をしたことがある。

一葉の住まつてゐた時分には一葉の家は前も後も四五坪の池になつてゐて、一葉の家の庭の池の水が、鈴木亭の庭へ流れ込んで、其處でも庭一面の池をなしてゐた。一葉の日記に據ると、一葉の家は元守喜といふ鰻屋の離家であつたといふのだが、家のかゝりなどから想像してみると、鈴木亭が元は守喜の母家であつたのではなからうか。尤も、橋の左側の家は今薪屋になつてゐるのだが、これが一葉時代には、御待合といふ柱掛形の看板のかゝつてゐる家であつた。守喜は或ひはその家の方であつたかも知れぬ。

さういふ風な大體の説明をしてゐるうちに、久保田君は路次のなかで御待合千鳥といふ看板を見付けて笑ひながら手帳へ書き込む。

一葉時代には、活動小屋の横町は極狹い拔裏であり、銀行の横町も今よりもずつと路幅が狹かつた。そして、その横町を入つて來た右角に紅葉亭といふ行燈の出しゐるその邊では一番大きいらしい銘酒屋があつた。銘酒屋は田町から曲つて此の福山町の通りへ入つて來る角のあたりから鈴木亭の前のところへまでかけて路の西側は先づ軒並さうだと云つていゝくらゐであつた。

何うして、此處へそんなに銘酒屋が多くできたのだらうか、といふ質問が誰かゝら出た。

僕の少年の時分には、此の邊から白山下の方へかけて一面の水田であつた。それが埋られて町ができだしたのは、明治二十年頃でゞもあらうかと思ふ。一葉時代―即ち明治二十七、八年頃には、まだ此の邊は新開の空氣が濃厚であつたのだ。

揚弓場がすたり氣味になつて、市内へ銘酒屋ができだしたのは、明治二十四、五年頃かと思ふのだが、福山町の銘酒屋も大凡その時分にできたのではなからうか。銘酒屋は横濱のチャブ屋の式が東京へ移入されたものかと思ふのだが、とにかく、新開にはまゞ最初にできる商賣であつた。

二

念のために斷つて置くが、銘酒屋の起源は幕政時代の水茶屋と見ることはできるだらうが、東京ではそれが一時滅びた形になつて、その代りに、その變形が横濱へチャブ屋となつて現はれ、それが又聊か變形して東京へ移入されたものだと、僕は思つてゐる。

一葉の終焉の家は本郷丸山福山町四番地にあつたのだ。一葉がその家へ移つたのは、明治二十七年の五月一日であつた。『やみ夜』の大部分から以後の作品は皆此の家でできたのだ。『行く雲』、『たけくらべ』、『濁り江』、『十三夜』、『別れ路』、『われから』といふやうな重立つた作品はことゞく、福山町時代の收獲にかゝるものである。

『濁り江』の諸人物に關しては、もう既に幾たびも書いたので、こゝにはすべて省略する。

自動車は田町の電車通りを引返して、春日町から富坂を本郷へ向けて上がる。思へば、此のあたりも隨分變つたものである。今の電車線路になつてゐる上富坂も下富坂も共に新道であつて、昔の上富坂は今の坂の南の方に狹い勾配の急な坂として殘つてゐるのだが、下富坂の方は今日では砲兵工廠のなかへ取り込まれてしまつた。

今の下富坂は砲兵工廠の控地、火除地の跡を通つて居り、現時の上富坂の方は昔の右京が原の南端へ築いた坂路である。一葉時代にはまだその原は沼地であつて、毒芹などの茂つてゐる空地面であつたのだ。

切通しへと向つて行く自動車はやがて、麟祥院の手前の角を左折する。おや〳〵龍岡町へ入るのかと思つてゐるうちに、眞直ぐに大學の構内へ入り、二三度曲り曲つて北門を出で、彌生町を抜けて、根津を通る。何時の間によくもかう開けたものだと車窓からキョロ〳〵見廻してゐるうちに、昔時の藍染橋のあたりかと思ふ路をば、三浦坂の方だらうかと思はるゝ方角へと進んで行く。車内では根津に遊廓——洲崎へ移る前——があつた話が出る。勿論、根津の花街を見たことのあるものは一行のうちでは僕ばかりであつた。近頃は逢初(あひそめ)橋と云つてゐるといふ話が出た。僕は、藍染橋と覺えてゐて紺屋があつたので、藍染川の名が起つたのだと思つてゐる。さういふ説明をしてゐるうちに、車は容赦なくドン〳〵進んで、高い陸橋へかゝる。これは全く始めての路である。久保田君は僕を顧みて此處を通つたことがあるかといふ。

『龍泉寺は僕が案内するんだが、此の邊はお蔭さまで初めて見る譯なんだから、案内の勞は出す入らずで、結局相殺になる譯ですね』

僕はさう答へて笑つた。

坂本へ下りたのだか、鶯谷へ下りたのだか、はつきりとは極め兼ねてゐるうちに、簞笥町の青物市場に入つて行き、それから、右折して、坂本の電車通りへ出る。

路に沿うた石の玉垣ばかり異様に眼に立つて社殿の方はあるかないか分らないくらゐに見すぼらしくなつてゐる三島神社の角を向ふへ入つて、一路、いよ〳〵大音寺前へと向つて行く。このあたりは罹災區域なので、焼け跡の何處でも見られるやうなバラックと空地の點綴で、建造中の町といふ何だか忙しいやうな急き立てられる氣分が胸に湧いて來る。

交番の少し手前で、自動車を乘り捨てゝ、電車線路を越すと、とにかく、一葉のゐた町内である。つまり、交番の向ふ角から眞直に揚屋町の非常門に至るまでの町

の左側の何の地點かに、一葉の住まつた家があつたことは確である。

三

持つてゐた『たけくらべ』の眞筆版の跋のところを開けてみると三百五十八番地であつたとある。これは僕自身が書いたので無論間違ひはないと思つたので、それに當たる家を探しだしたが、通りの方の左側は皆三百六十代の家ばかりなのだ。番地を追つて横町へ曲つてみると三百五十七番地はある。その家の者に尋ねると三百五十八といふ番地は此の邊では聞いたことがないといふ。此邊は吉原の大火（明治四十二年頃かと思ふ）に燒け、無論大震の時の罹災地區でもあるのだから、さういふ番地は消滅してしまつたとしても、何うも横町では、僕の記憶と合はない。一葉の故宅が表通りの左側であつたことは、何う考へてみても間違ひはない。それで、もう一遍表通りへ出て、揚屋町の非常門まで行つてみる。

此處が位置がいゝといふので、同行の讀賣の寫眞版子は一行の撮影をして、もう

此處へ來るまで二三枚撮つたからと云つて、歸つてしまふ。

此のあたりも震災以前に一度歩いたことがあるのだが、何うもその時の記憶とは餘程違つて居る。現今では龍泉寺の通りが非常門まで大凡一直線になつて居るのだが僕の覺えて居るところだと、昔の路は非常門から少し斜になつて龍泉寺の通りへ出てゐたやうなのだ。かうなつて來ると福山町のやうな昔の目印の溝や家がそのまゝ殘存してゐるところとは違ひ目印と云つては電車通りの向ふの交番と此の非常門きりなのだから、何うにもしやうがない。通りを交番の方へと引つ返し、左手の『京町を經て淺草公園に至る』といふやうな門柱形（もんちうかた）の路標の立つて居る横町へ入つてみる。此れは少し斜になつて京一の非常門へ通じてゐるのだが、此の路には何うやら記憶がある。菊版二冊本の『一葉全集』の後篇の跋には僕は次のやうに書いてゐる。

『當時京一の非常門の少し手前から先は、路がお齒ぐろ溝に沿うてゐて……一葉君の家はお齒ぐろ溝手前の角まで行かないうちの左側で、角から四辻の交番の方

へ一町とは寄らない所であつたやうだ』

まことに要領を得ない説明ではあるが、京一の非常門を起點にして考へてみると、大凡見當はつきさうでありはするものゝ、現に僕自身で書いた『眞筆版』の跋には三百五十八といふ番地であつたとなつてゐるのだから、表通りの番地とは何うしても符合しない。

久保田君は千束町に住んでおいでの俳人增田龍雨君ならば、此の邊のことには曉通してゐるので、同君を呼び出さうかと提言する。その方が話が早からうといふので一行四人で、吉原の外廓に沿ふて歩き出す。お齒ぐろ溝はもう埋られてゐるが、家の裏手には木の踏段などが殘つてゐて、昔の刎橋の位置が想像せられる。讀賣の平林君のために刎橋の形などを説明し久保田君が暗誦してゐる『春は櫻の賑ひより かけて』以下の一節のなかにある『茶屋が裏ゆく土手の細路』の跡――今では昔のお齒ぐろ溝の上かも知れぬ――を拔けて土手へ出る。勿論もう土手ではなくなつてゐる。廓に沿ふて千束町へ入ると、此處の溝も埋られてしまつて、路の眞中に石で

緣取つた部分ができてゐる。これが溝の跡ではないかと思はれる。少し行つて左折、し千束の賑かな通りへ出て忙しい身體の增田君を久保田君が無理やりに引つ張り出して來た。

四

災後の廓内が何んなになつて居るかと思つて、角町の非常門から入る。此處も勿論假普請の家ばかりで、昔の高樓軒を連らねてゐた面影は殘つてゐない。何となく第二流の都會の花街のやうな氣がして哀れに思はれた。見るところ、娼樓でない並の商賣屋がふえて來る傾きがあるのではなからうか。更に又、所謂大店と稱した大厦が今後は少くなるのではなからうか、或は又、大きい店に纏まつてしまつて、中以下の店がずつと少くなり、要するに娼樓の數も妓女の數もずつと減つてしまうのであらうか。何れにしても此の遊廓が昔のまゝでゐられる氣遣ひはなかりさうである。

『たけくらべ』には、直接廓内の景趣を描いたところは極く〳〵僅であるが、それにしても、此の大遊廓の影響の最も強い地區の人情風俗を全く繪の如く活寫したところに此の作の生命はあるのであるから、吉原の餘程變り來つた今日になつては、『たけくらべ』の所々に註解を施すべき必要が今後次第に增して來さうに思はれる。

揚屋町の非常門を出て、先づ鹽煎餅屋であつたといふ田村屋は傍に石橋があつたので、石橋の田村屋と云つてゐたといふので、その石橋は何の邊であつたかといふ點を確めようとしたのだが、餘りに家々の商賣が變つてしまつてゐるので、さすがの龍雨君も石橋の舊位置を指點し兼ねた。横町へ曲つて三百五十八番地を探したが勿論見つからない。

『假りに三百五十八番地が此の横町にあつても、それでは僕の記憶には合致しない。一葉の家は何うしても表通りにあつたと思ふ』

僕がさう云つたので、今度は又表通りへ出て、京一の非常門へと通じてゐる横町へ入つてみた。何うも此の路には確に記憶があるのだから、田村屋は此の横町にでもあつたのではなからうか。さうすると、此處を出た表通りは番地が三百六十臺なんだから、或ひは、今までに、土地整理などのために番地の組み換へが行はれて、それが爲めに元の番地がちがつてしまつたのかも知れぬ。そんなことを云つてゐるうちに、たうとう電車通りまで出てしまつたが、龍雨君が交番で念のため聞いてみようかと發議したので、新潮社の石原君が向ふ角の交番に飛び込んだ。やがて、勇んで引つ返して來て表通りの左側の肴屋がその番地に當るのだといふ。喜んで一町程後へ戻つて行つてみると、それは三百六十七番地だといふ。その次ぎの酒屋と乾物屋が三百六十八番地なのだ。其處で、龍雨君、久保田君、平林君、石原君と四人で、此の邊に少くとも三十年以上住まつてゐる商家を聞きだして、其所で聞き合せてみようといふことになつた。平林君が二三軒聞いて廻つた後で前に云つた酒屋から『たけくらべ』にある上清（じやうせい）の跡は右側にある綿屋であり、石橋の田村屋の跡は揚屋町寄りの時計屋になつてゐるといふことを聞きだして來た。酒屋の五十臺の内儀さんは樋口といふ名は確に覺えがあるやうに思ふと云つたさうである。で、一行は

上清と田村屋の位置を確めてから、三五八といふ數字は三六八の間違ひだらうと略決して、横堀だの、水の谷の池だのゝ位置（舊跡）を龍雨君の嚮導で見て廻つた。

越えて十八日に、石原君來訪。久保田君が三五八の點をもう一遍調べてくれといふ話だといふので念のために、二冊本の『一葉全葉』の跋（拙者筆）を見ると確に三百六十八番地となつて居り、縮刷本の跋の方も同じくさうなつて居る。つまり、僕の粗忽で、その後のものを書く時に六を五と書き誤つたに相違ないのである。

一葉の日記には左隣りは酒屋だとあるのだから、前記の乾物屋が一葉の荒物屋の跡に相違ないことになるのだ。

劇になつた「濁り江」と「十三夜」

一

『濁り江』と『十三夜』とのなかの人物の性格でも宜しい。尤も、その外に、面白いものがあれば何でも宜しいといふやうな編輯者からの註文であつたが、差しかゝつて、何ういふものをといふ考も無いので、編輯者の口から最初出たまゝに、『濁り江』と『十三夜』の話にする。

所で、一言お斷りをして置か無ければならん事は、『濁り江』でも『十三夜』でも、小説で長年見慣れて居たものであるのだから吾々が脚本になつた『濁り江』『十三

夜』のなかの人物のことを書く場合にも、小説の方に對して從來吾々が持つて居つた考に據り勝ちになるであらうと思はれることである。さうだとすると、脚本の話では無くなつて、小説の註釋になつて了まふ譯で、直接には芝居の方に緣の無いことになるのであらうが、然し『濁り江』『十三夜』のやうな原作の小説の筋に重きを措いて脚色された劇の場合にあつては小説註釋に傾むいたものでも、可なりに演出若くは見物の際の參考にはなるかも知れぬと思はれる。先づそんな位な考で書き進んでみる。

先づ『濁り江』の方から始めるが、『濁り江』が始めて劇になつたのは、大正七年六月であつたと思ふ。芝居は歌舞伎座で、役者は河合、喜多村の一座であつた。二度目は今年のこれも六月で、芝居は有樂座、役者は村田、東儀一座であつた。脚色者は最初の時は、眞山青果氏、二度目の時のは、川村花菱氏であつたとか聞く。で前の時は、小説通りに先づ二十八九年頃の時代の風俗を見せることに骨折つたのであるが、後の時は、何ちらかと云へば、先づ現代の事件として脚色されて居たやうに思はれた。少くとも、古い時代の色彩を出さうとする骨折りは、さう顯著で無かつたやうに思はれたのであつた。尤も、此の二つの場合は、劇の性質が餘程違つて居た。前の場合では、謂はゞ舊劇に近いやうな氣分であり、後の場合は、何と云つても、所謂る新劇らしいところが表はれて居た。

所で『濁り江』は、現代の事件として演ずべき劇であらうかといふに、何うも私どもにはさう思へ無い。

小説としての『濁り江』の價値は、彼の時代に於て、酩酒屋の如き、裏店の生活の如きをあれ迄に善く寫生して、ロオマンティックな作品へ織り込んだところにある。言葉を換へて云へば、日常生活に對する作家の觀察、理解が、人生に對する大摑みな作家の考と交錯して居るところが面白いのである。故に『濁り江』の如き作品から時代の色彩を取り去つて了まへば、後は極く平凡なものしきや殘ら無い譯になるのだ。けれどもそれならば、きつちり何時頃の時代の事にし無ければならんのかと云はれると、彼の時代小説のことであつてみれば、何うしても何時頃の時代の

事で無ければならんといふ風に、決定的に書かれて居るものでは無いのであるから必らず二十七八年頃の事にし無ければならんのだとは云ひ兼ねる。又假りに、その點は大凡明治何年頃といふやうなことをきめ得たにしたところで、さういふ時代なるものが、舞臺で出せるものだか何うだか、少くとも甚だ疑はしい。服裝とか、道具とかいふやうなものは、吾々だつてさう一々は覺えて居無いし、言葉の變遷なども亦、吾々の記憶に殘つて居るか何うだかさへ判然し無い。又、さういふ物が皆可なりに再現せらるゝにしたところで、それを演ずる役者の心持なり、見物の心持なりは全く現代のものであるのだから、作者なり、舞臺監督なりの所期が何れだけの效果を舞臺上に表はし得るかは、全然疑問である。

それならば、結局、現代の事として演ずる方が、役者にはし勝手が善く、見物の方も何の骨折もせずに濟むから、よからうでは無いかといふ議論になる譯であるのだが、私は矢張り、現代の事としては、あの儘では、餘りに平凡なものになつて了まふと思ふ。『濁り江』は、あの小說のまゝで脚本にするものとすれば、現代で無い。何時か――それは何年頃としかと極める要は無いが――過去の時代の事として、演ずべきものであると思ふ。

二

『濁り江』の菊の井といふやうな曖昧屋は、此の四、五年前にあつたやうな酩酒屋でも無いし、又、その頃方々に在つた曖昧な小料理屋とも少し違ふ。近頃のさういふ曖昧屋よりも、少し粹なものであつたやうに思はれる。謂はゞ、場末の藝者屋と曖昧料理屋との間位のものと思ふべきであらう。先づ、田舍の內藝者の居る料理屋位なものに考へたら、何んなものかと思ふ。けれども、『濁り江』の菊の井は當時丸山福山町あたりに實際あつた曖昧屋を餘程作家が謂はゞ理想化したものゝやうに思はれる。

で、歌舞伎座の時の菊の井は、少し立派過ぎた。有樂座の時の方が、もつと寫實的であつたと思ふ。

其所で、お力は、小説に描かれて居るところでは、餘程理想化されて居る。當時でさへあゝいふ酩酒屋女が實在して居たか、何うだか、甚だ疑はしいと思ふ。

一時は藝者でもして居た女が、何か仔細があつて、あゝいふ境遇になつたものと考へるとすると、少し年が若過ぎるやうであるし、又、さうで無いとすると、あれ位な女ならば、直きに藝者か何かになつて了まつたらうと思はれる。お力のモデルは作者一葉の住居の入口のところに在つた鈴木亭といふのに居たお留とかいふ女であつたのださうだが、その女は直きに數寄屋町の藝者になつたといふのである。

けれども、さういふ理想化された點は、兎に角として、實際上何ういふ心持で居る女であるかといふ點は、大凡極めて置か無ければ、演出には困まる譯であるのだから、大體の考は何とか極めて置か無ければなるまい。

小説では、お力は、『祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて斷食して死んださうに御座んす……私の父といふは三つの歳に縁から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも厭とて居職に金物をこしらへたれど、氣位たかくて人愛のなければ贔屓にしてくれる人もなく』と云つて居る。作者の考では、お力をば侍階級若くはそれに極く近い傳統のある家の子としたところに可なりの意味を持せた積りであるのだらうと思はれる。此れは、さういふことが當時は世に有り勝な事であつて、世の變遷を語る現象の一因子であつた爲めばかりでは無い。侍階級の傳統のあつた家の子から酩酒屋女への墮落は非常な墮落であり、落魄である。少くとも、作者はさう解釋して居たと見るべきである。お力の淪落は境遇上已を得ざる徑路を辿つて來たものにしたところで、そのうちに捨てばち的な心持を含んで居たものと見るのが至當である。さういふ淪落は、幾分自ら進んでなすところのものである。其所に何等か快心の感もあり、慰藉の感の如きものさへある墮落である。我慢と反抗、さういふものは、斯ういふ墮落の徒の心の强みである。

お力が侍階級若くはそれに近い傳統の子であつたといふ點に原作者は餘程力を入

れて書いて居るのではあるが、今日脚本として取り扱かふ場合には、それはもう何うでも宜しいことであらう。もうさういふ傳統を重ずる精神などは、今の世からは消え去つて了まつたからである。

小說では、お力が朝之助に『お前は出世を望むな』と云はれて驚くところがある。此の出世といふのを、脚本の場合に何う解釋して宜からうか。お力の心で求めて居るものがあつたとするならば、それは單なる出世卽ち金持とか、高官とかの妻になること、唯物質的富裕な位地に納ることだけであつたであらうか。お力は、自覺ンては居無かつたかも知れぬが、さういふものだけを求めて居るのでは無かつたらうと思はれる。『出世を望む』といふのは、自由を欲し、解放を求める聲と解釋すべきであらう。それは小さい意味でのことであらうが、謂はゞ自由、不羈な天地への脫出か――よし無意識であつても――お力の望み求めて居たものであつたと解釋すべきであらう。

三

結城朝之助との關係は何う見るべきであらうか。原作では、朝之助の描寫が甚だ模糊として居る。無論此れも作者の理想化を經た人物である。作者は、品の好い男といふのに一種の型を拵へて居た形であつて、唯だ鷹揚とか男らしいといふやうなところを極めて概念的に書いて居るだけであるのだから、何うも取つ捉へどころが無いやうな氣がしてならぬ。然かし、お力の方から見れば好きななつかしい人ではあるが、境遇の差、年齡の差、その他で極く好きなお客以上の關係をばさう深く越して進め無い狀態であつたので、お力の立場から云へば、朝之助の性格が模糊として居るのに無理は無いことにはなるのであるが、さればと云つて、唯だ朦朧とした人物として演出するといふのは、役者に取つては迷惑な事であらう。

此れまで出來た脚本の通りで行くとすれば主要の人物のやうでもあり、又さうでも無いやうにもなるのであるが、要するに側の人物になる譯であるのだから、劇の

キヤタストロオフに關係の無い人物として演出して宜からうと思はれる。

結城はお力には戀愛を持て居るものとは思はれ無い。あゝいふ場合結城に取つてはお力は氣に入つた女といふに過ぎ無いのだ。さういふ關係は、原作者の旦那――卽ち紳士に對するコンセプションから當然生ずる考であるのだが、今日でも、さういふ關係は隨分多くあり得ることである。朝之助の性格は、落着た、物の解りの速い、思ひやりのある若い――三十位の――紳士として演ずべきである。態度、服裝の如きも餘り粹に作らぬ方が宜からうと思ふ。役者の素の服裝を誇張したやうな着付けでは駄目である。これ迄二度見た結城朝之助は何だか輕薄な男らしくつて、何うも厭であつた。原作には結城の職業は無職業とあるのだが、此れは文學者位なところにして置いても宜からうと思はれる。

お力は源七に對して戀愛的關係になつて居たのであらうか。さうのやうに解釋し得べき辭句が原作のなかには所々に散在して居るやうに見えはするが、お力の心には源七に對する憐憫が主たる感情になつて居つたやうに思はれる。源七に妻子があるを爲めに、お力が諦めて居るといふ風に解釋すべきでは無からう。

源七の方は、單純に惑溺と見て勿論宜しい。これは、原作に書かれて居るところに一點の疑も生じ無い。

源七が妻子を追ひ出してから後、心中を思ひ立つたかといふにこれはさうでは無く、お力に逢つてからの事件の發展であるといふ解釋が自然である。此の點では、脚色者兩君に贊同せざるを得無い。

然し、原作に『何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ、湯屋の歸りに男に逢うたれば、流石に振りはなして逃げる事もならず、一緒に歩いては居たらうなれど、切れたは後袈裟、頰先のかすり疵頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない』とあるのを、字義通りに取つては妙味が無いと思ふ。あれは人の噂で、實際はお力の死骸には後疵は無かつたのだと見度い。卽ちお力の方では全然承知の心中であつたことにし度いと思ふのだ。

後に一つ殘つた人物は、源七の女房のお初であるが、これは、酩酒屋の女等に對

してはコントラストをなす性格として描かれて居るやうに見える。おとなしいが、然し甲斐々々しい、なか〳〵はき〳〵した性質の女である。源七に意見をし、恨みを述べるところは、思ひを十分内に持つて居ることにして、言葉の調子や態度は決して荒らく無く演じた方が、趣が深い。怒鳴り立てゝ、摑みかゝりさうな風に演ずべきでは無い。有樂座の時のお初は、少し荒つぽ過ぎたと思ふ。寫實で行くと、あれの方がいゝかも知れぬが、『濁り江』といふ劇全體が決して寫實劇では無いのだから、何の部分に對しても、寫實以外の用意が必要である。

四

次は『十三夜』だが、此の小説の氣分はレシグネエションの氣分であつて、極く靜かな、寂しい哀感を起させるものである。さういふところに、此の作のポオエツリイがあるのである。これも吾々から見ると、作の時代を離れては、餘程餘韻が少くなるものに思へるのだ。從つて矢張りこれも劇にする場合には、何時でも構はんが現代で無いといふ心持で演ずべきものであらうと思ふ。

今年の五月であつたか、常盤座で『十三夜』が演ぜられたのであるが、此れは餘まりに、此の小説の持つて居る氣分――それを無くすれば此の小説に描いてあるやうな事件は劇にする價値無し――を破毀したものであつた。殆どわざ〳〵骨折つて原作全體に滿ちて居る氣分を破毀して了まつたやうなものであつた。

『新演藝』の八月號に出た岡田夫人の『十三夜』は十分に原作を重ぜられたものであつて、原作の氣分が十分に表はれて居る。唯時代を現代とせられたのは如何であらうが。明治の或る時代位にして置かれた方が宜しかつたらうと思ふ。尤も、現代とはしてあるものゝ、特に現代だといふ氣分を出すのに骨折ら無ければならん性質の劇では無いのだから、その點は敢へて强調するのでは無い。事實上では、結局時代のはつきり極まら無いものになるのだといふ説明でもある譯ならば、それでも宜しからう。

唯だ現代とすると一寸具合が惡からうと思はれるのは、お關の教育程度である。

お關は女學校教育を更に受け無かつた女となつて居るのだが、齋藤のやうな主人を持つた家ならば、現代ならば、何うにかして、女學校教育は受けさせたらうと思はれる。若し、現代でありながら、あれ位な教養あり、品格ある主人を持つて居る齋藤の如き家で、娘に何等の中等的教育を受けさせ無かつたとするならば、それは餘程特殊な事情のあつた場合であるべきであらうから、さういふ特殊な境遇に生ひ立つた娘をば、何ぼ先方からの懇望であつたからと云つて、原田のやうな謂はゞ大部人附合などの多い男に嫁せしめたといふのは、親の不覺であり、行つた娘自身も餘まりに考が足り無かつたと云は無ければならぬであらう。此の如く、此の縁組がお關並にその親たちの不覺悟に起因するといふことになれば、お關及び齋藤の人々に對する同情は無くなつて了まふであらうと思はれる。若し、さうなつて來るものとすると、『十三夜』のやうな氣分の劇の成り立ちには、非常な障碍であるに違ひ無い。

所が、明治二十七、八年頃だといふと、まだ女子が中等教育を受けることが今日程には一般的では無かつた。まして、原作では、お關が原田に嫁したのは、明治二十二、三年頃になる譯なので、その時分では、少し富裕な家の娘か、さも無くば餘程學問好きな家の娘かで無くば中等以上の教育を受ける慣はしでは無かつた。即ちさういふ時代にあつては、中流社會の娘は、所謂る女學校教育を受け無かつた方が一般的と云ひ得られるのであつた。從つて、さういふ娘でも、人柄さへ好く、相當に智慧才覺がありさへすれば、相當な家庭の主婦として、決して、恥かしからず、且不便無くやれて行けるのであつたのだ。故に、さういふ時代の事とするならば、お關が原田へ嫁したのも、お關を原田へ嫁さした兩親の考にも、さう無理は無かつたと云へるのである。これならばお關に十分同情が寄せ得られるのである。

斯う云つたところで、岡田夫人の、『現今（原作は明治二十八年頃の作なれど此脚本は特に時代を現今に寫したから）』と云はれて居るのを、眞向から非難する譯では無い。何となれば、脚本全體を讀んだ感から云ふと、岡田夫人も敢へて現今の事とし無ければ何うしてもいかぬといふ程までに、原作に變更を加へられたやうには見え無いからである。多分時代は宜い加減な事にして置くといふやうな考には、大し

てご異存は無からうと思はれるが、如何であらうか。

第二には、岡田夫人の『十三夜』は二幕三場となつて居るのだが、第一幕、即ち高坂錄之助の住居の幕は無い方が宜しくは無いか。近代劇では傍白とか獨白とかを澤山に使ふ譯に行かぬのだから、勢ひ小說の地の文になつて居るところに代へるに、別に幕なり場なりを補足せざるを得ざる譯にはなるのであらうが、お關の心のうちに錄之助の事がさう深く殘つて居たのでは無からうから上野の場で不意に出逢つたことにならないと、效果が薄くなるやうに思はれる。よし、亥之助を出さ無いことにするにしても、錄之助の住家を先きへ出して了まひ、且お關が錄之助の居所を知つて居ることにして了まつたのでは面白く無い。第一幕を除くとすると、いろ〳〵不便は生ずる事であらうが、それでも、何とか今一工夫煩はし度い。

さて、お關の性格に就ては、小說の場合でも、脚本の場合でも、さう疑義を生ずるやうな點は無いと思ふ。貧乏ではあるが、品格のある家庭に育つた娘で、人の妻としては飽くまでも、堪忍深く愼ましくあるべきだといふ考を、何處までも守る氣で居る女である。前代の氣立ての好い女に通有な忍從の心の强い性格だと考へるべきであらう。

お關が十三夜の晩に里へ來て、離緣にして貰らひ度いと、兩親に願ひ、その後で、父親に諭されて、良人のもとへ歸ることになる場合にあつて、お關の心に一番强く訴へたものは、子に對する愛であつたやうに見えるのであるが、お關をして始めの決心を翻へさしたものは、唯自分の子の太郎に對する愛ばかりでは無かつた。自分の境遇をば全くの廻り合はせだと諦めて、それに忍從する心持が餘程强い働をして居ると解すべきであらうと思ふ。

お關が錄之助に對して持つて居た心持は、戀であつたのであらうか。今日の考から云へば戀と云はんには餘まりに淡き且弱き感情であつたやうに思はれる。寧ろ處女が持ち勝な空想の少し濃いもの位に考へるべきであらうと思はれる。

五

錄之助のお關に對する感情は何うであつたらうかといふに、これは、小說では、確に戀愛であつたやうに思へる。從つて、錄之助の放埒、それに續いての落魄の原因が、謂はゞ失戀の憤りから生じた絕望的行動にあるのだとするのが、一番平明な解釋ではあるのだが、脚本の場合には、錄之助は自分の放埒の原因が、失戀の寂しさにあるのだとは、十分に自覺して居無かつたことにするのも、一つの考であらうと思はれる。唯人生の寂びしさといふやうな感から、酒にひたり始め、遊里に入り始め、それがどん底まで行つて了まつたといふやうに考へても宜しからうと思ふ。

現代の人々から見ると、戀でもあり又戀でも無いといふやうな中ぶらりんの境地は、如何にも齒痒い。物足り無いものに思はれるであらうけれども、吾々に取つては、さういふ淡い、朧氣な境地に、甚だ詩的な情調が認め得られるのである。

靈と靈との接觸とか、人間性の解放の路としての戀愛とかいふのなら、大に意味があるけれども、唯だ男女の性的接近だけとしての戀愛は、個々の場合としては、何等の興味も寄せ得られ無い。寧ろ、人間の心持が靜に寂しく齟齬し行く哀愁の境地に心を引かれるのである。

錄之助のお關に逢つても、格別嬉しい顏もせず、何だかたゞぼんやりとして居るといふところが大變宜しいと思ふ。人生に興味を失ひきつた男の心持が其所によく表はれて居ると思ふ。脚本にも大凡の心持はあると思ふ。演者の注意すべきところである。

脚本では、お關と錄之助とが泣くところがあるのだが、これは泣かずに、何と無くうちしほれて話をすることにする方が宜しいと思ふ。泣くよりは、泣かずに寂しさを見せる方がもつと感が深からうと思ふ。

『十三夜』では、お關の父の齋藤主計が一寸と六づかしい役にならうと思はれる。品格のある、人情の善く分つた、察しの十分ある老人、所謂る士族の果ての老人、よし、吾々の父とか兄とかいふやうなさういふ老人そのまゝのもので無いまでにしても、原作のあの言葉をあの儘用ひることにするのであるとすると、いや、上野新坂下の齋藤の家の場の情調をば原作のに近いものにして出さうといふのであつた

ら、齋藤老人も、可なり原作の人物に近いものにならなければなるまいと思はれるのだが、今の若い役者に巧く行くか何うだか。幾らか年配の役者で無くば覺束なさうに思はれる。

斯う書き終はつてから、讀み返してみると、果せるかな、始めに斷つた通りに、何うも、小說の方に據り過ぎたやうな感がするけれども、私としては、前にも云つた通り、これは何うも已むを得無い事である。

一葉舊居の碑

上

『先き頃番地の變更がありましたんで』

先月二十日に尋ねて來た安川安平君はさういつた。詰まり、樋口一葉の舊居として、僕などの覺えてゐる三百六十八番地といふのは現今ではずッと裏の方になつてしまつて、三百四十一ぐらゐなところが、昔の三百六十八に當るのだといふのであつた。

『あすこは元茶屋町といつたのですが、一葉さんがおいでの時分のことを知つて

ゐる人が今幾人も殘つてゐますから、場所のところは大丈夫です』

安川君のさういふ言葉に對し、僕は念のために、下谷の區分圖を出して見せたのであるが、安川君の指し示した地點は確に僕の記憶に殘つてゐる一葉舊居の地點と合致した。

安川君の話では、碑を立てる場所は、嚴密にいふと、實際の舊居の跡よりは少々は西へ寄つてゐるのだが、そこは醫者の家があつて、その前のところが、奥行七尺間口四間ほどの空地があるので、家への入り口を一間半ほど殘し、あとの地面を建碑の地域に使ふことにしたといふのであつた。僕のはじめの考へでは、あの通りには、それだけの空地でさへとてもなからうと思つてをつたのだから、しかも、舊居の跡の極近くのそこを使ふことのできるのは、至極宜しいことだと答へた。

『菊池さんは、一體この碑文は馬場先生にたのむのが、一番いゝのだが、是非僕に書けといふのなら、書くといふことでした。字も僕の書いた文章を先輩の馬場さんにたのむわけには行かぬと菊池さんはいはれました』

安川君はさういふ説明もした。僕の方では、龍泉寺町の諸君が一葉の舊居の跡をばさういふ風に確に知つてをられる以上は、何もいふべきことはない。建碑の擧はまことに結構なことなんだから、無論大賛成である旨を答へた。

安川君は趣意書のなかの碑の圖を見せ、賛成者として僕にも署名してくれといふのであつた。僕は直ぐ署名した。

それから、碑の周圍へ植ゑる樹のことなんだが、柳がよからうと思ふのだが、柳は今は植ゑかへの時期でないきうだから、それは何れそのうち季節を待つことにするがその外では、何んな樹がよからうかといふ相談であつたので、僕は一葉の『そぞろごと』といふ隨筆のなかに『雨の夜』といふ一節があつて、それは庭の芭蕉のことを書いたものであるし、現に本郷丸山福山町四番地の一葉の家には庭に池があつて、その縁に芭蕉があつたのであるから、芭蕉などもよからうではないかといふと、安川君は、成るほど芭蕉といふものは一寸いゝものだから、それを植ゑることにしようといつた。

安川君は、なほそれから、建碑式の時には僕も來てくれるかといふ話なので、僕ばかりよりは、何うせ人を呼ぶやうならば、諸君の好意を知らせるために、一葉の遺族、一葉の友人などを呼んだら宜しからうといつて、紹介狀やら紹介の名刺やらを書いて、安川君に渡した。詰まり、僕に異存がないといふことをば、一葉側の關係者たちに知らせる方が宜しいと思つたからであつたのだ。

『尋ねて來て、いゝことをした』

安川君は率直な調子でさういつて歸つて行つた。

中

先月の六日に安川君は再び來訪された。前回の時に、建碑式は七月に入つてからといふ話であつたので、それは丁度宜しい。一葉が龍泉寺町の家へ引き移つたのは、明治廿六年の六月廿日だと日記にあるのだから、できるならば廿日頃にしたら何うであらうと僕は提言して置いたのであつた。それで、安川君は、廿日からは防空演習が始まるのだから、建碑式の日取りは、十八日か十九日にしたいといふことや、近日碑を立てることになつてゐるのだから、植ゑる樹の位置などの指圖をしてくれないかといふ相談などで來られたのであつた。石を立てる日の通知があるならば、行つてみようと答へた。

龍泉寺町（卽ち茶屋町）の通りはあの通り狹いのだから、建碑式といつたところで、其所では、數人の關係者が立ち會ふに過ぎない。それで、人々に集まつて貰ふのは、電車通りの西德寺といふ寺にしたいといふ話であつた。

十二日の晩に樋口悅君が來て、十四日に石の立つところを見に、龍泉寺町へ行くことを約したのだが、それがもう一日延びて、十五日の午前に、悅君と一緒に大音寺前へ行つた。碑の立つ場所はもう臺と地行はでき上がつてゐた。末廣病院のなかから安川君が出て來たので、それに迎へられて、病院の二階でひと休みしてから、電車道を越えて大音寺へ行つて、『たけくらべ』の藤本信如のモデルらしいといはれてをるよしの大音寺廿四世の住持加藤正道（法名は順譽正道和尙）の墓を見、驚

神社を見、又引返して、西徳寺のなかを見た。西徳寺は鐵筋コンクリートを主體にした、本堂にもベンチが列んでをるといふやうな全く現代式の立派なお寺であつた。

病院へ引つ返して來て、そこで矢野鉉吉氏を初め、町會長の瀧山清治、有志の大橋榮二、谷古善、伊禾寅雄、高木友之助等の諸氏に逢つて、昔の話などを聽いた。

碑はもう龜有町の石工森田常作氏のところを出たといふ話であつたが、やつと正午頃になつて、トラックが著した。碑の重量が四百貫の餘もあるので、トラックへ載せるだけに二時間餘もかゝつたといふのであつた。

さういふ風であつたので、トラックから引き下ろす作業が大變であつた。長い丸太を三本斜めに立て、その頂邊を鐵條で縛り、それへチエーン・ブロックを附け、鈎を碑を縛つてある太い麻繩にかけて、碑を釣り上げ、トラックを離さうとするのであつたが、丸太の高さがうまく行かぬためなのであらう、碑を釣りあげても、トラックの後部の少し高くなつてゐるところへつかへて、なか〳〵トラックを離す譯

に行かぬ。何うもそれらのさま〴〵な操作で三時間程は費へてしまつたらしい。

四時頃であつたらうか、丸太の先が高くなるやうにし、鐵條をもいはへかへ、うまく碑を釣り上げることはできたが、人道の上へ立てゝあつた丸太の本の方がアスファルトを破つて土中へ二、三尺もめり込んでしまつたので、碑はドタリと人道の際へ横はつた。それからは、石屋の人々ばかりでなく、さま〴〵な人々も助力して、碑の下へかへ物をして、滑らすやうなさまざまな作業をし、又丸太や、チエーン・ブロックの助けを借りて、碑を縱に起して、既に出來てをる臺石の上へ立てゝしまつた。それはもう五時を少し過ぎてをつたであらう。

下

碑は花崗岩で、高さは六尺近く横も五尺ぐらゐはあるやうに見受けられた。それで、肩のところと下のところで四隅を少し切つてあるので、謂はば腕と胴の短い十字型とでも云へさうな形である。碑文のところは縱一尺五寸、横二尺ほどになつて

ゐるやうであつて、あとの部分は磨かずに、縦に石目が切つてある。要するに先月安川君が云つた通り、全くハイカラな形のものである。背景が病院のモダーン建築なんであるから、碑はこの形の方が調和が宜しいであらうと思はるゝ。

樹は既に高野槇、椿、その外小さい雑木が植ゑてあつたが、芭蕉の外に、根を十分に廻はした六角堂柳があつて、これなら、つくこと請合ひだからそれを植ゑると、植木屋が云つて居ると安川君は話した。

今憶ひ出したことなんだが、一葉の福山町の家の入り口には、可なり太い幹まはりの柳があつた。そんな縁故で、柳を植ゑるのは至極宜しいと僕は思ふ。安川君の説明では、碑の下のところへ少し水溜めを作つて、水蓮でも入れようかとの話であつた。

さういふ風に、その日は碑を臺石の上へ据ゑただけのことにして置くといふのであつたので、樋口君と僕とは歸途についた。

ところで、此所で一寸書いて置きたいことが一つ二つある。

谷古善氏は一葉居住の當時はまだホンの少年であつたが、一葉は洋髪で袴をはいて往來したので、この邊では殊に眼立つた婦人であつたと云つて居られる。ところで僕は龍泉寺町居住の時の一葉に逢つたのはたつた一度であるが、その時の一葉の髪は銀杏返しであつたと記憶する。福山町へ引き移つてからは、度々といつていゝほど尋ねて行つたが、何時も一葉は日本髪であつた。一葉は學校は小學校きりなんだが、可なり日本流であつたと想像せられる。中島歌子さんのところへ袴をはいて通つたのであらうか。一葉は、著物のことはところ〴〵日記のなかに書いてゐるのだが、袴のことは少しも書いてゐない。外を歩いてゐる一葉を一度も見たことがないのだから何ともいへないのだが、少くとも福山町へ越してからは、一葉は袴ははかなかつたのではなからうか。

多町へも買ひ出しに行つたといふ一葉が、袴をはいて何處へ行つたのであらうか。何うも中島歌子のところではないであらう。或は上野の圖書館などへは袴をはいて行つた方がいゝと思つて、その時だけ袴をはいたのであらうか。

一葉のところへ尋ねて來た人、例へば野々宮菊子といふ人などは或は袴をはいてゐたこともあり得やうと思はれる。

もう一つは、龍泉寺のいはゆる茶屋町の路は現今は揚屋町の非常門のところまで眞つ直ぐに通じてゐるのだが、昔は確に一葉のをつた家の少し先のところで、路が曲つてをつた。

これに就て、谷古善さんの説明は聽いたのだが、今江戸の切り圖のうち『下谷、三輪淺草三谷邊之繪圖』を見ると、路は少し左へ曲つて、大凡江戸町一丁目の非常門の邊へ突き當り、それから土手の方へ左折してゐる。僕の記憶では、一葉の家を出てから、土手までに非常門は一つしきや見なかつたやうに思ふのだから、一葉時代の路も此の切り圖の通りのものではなかつたらうか。

山田美妙齋の廿五周年に當りて

上

十月の二十四日は美妙齋山田武太郎氏の廿五回忌に當るといふ。山田氏は明治四十三年の前掲の日に享年四十三で、本郷富士前町の僑居で病歿したと傳へ聞いてゐる。

文人としては、僕等よりもずつと先輩であるのだから、全く面識はない。のみならず、一體に交友の少かつた人であつたらうと思ふ。從つて、晩年はまことに淋しく暮してをられたことゝ思ふ。何時とはなしに、文壇進歩の中心から落伍した形に

なつて、病歿の時分にはもう殆ど世に忘られたやうになつてゐて、如何にも悼まし
き終末であつた。

明治三十八、九年からのいはゆる自然主義文學の勃興は恐るべき大海嘯の如く、それまでに殘つてゐた明治前期の人をも主義をも一遍に押流してしまつた趣きがあつた。それ以後の文壇の傾向は、よし自然主義とは全然反對に見えるものまでも、實は皆自然主義の影響のなかゝら生れたものだと認めない譯には行かない。

その時代には、もう恐らく、山田氏の健康は餘ほど衰へてをつたのであらうと思はれるが、よし壯健であられたにしても、立直らんには餘りに文壇の潮流から離れ過ぎてゐたらうと思ふ。

それにしても、山田氏にして、一家獨特の文體を持つてゐるとか俗群を拔いた思想を抱いてゐたとかいふ風で、いはゆる名人肌の人であつたのであつたら、文名がもう少し長く續いたのであらうと思はれるのだが、さういふ點は山田氏の長所となつてはゐなかつたのだ。

所詮は、山田氏のわが明治文壇における位置は、氏の開路者としての功績を認めた上で、定められるべきものである。

山田氏は明治の小說壇における最も早き言文一致創始者の一人である。いさゝかではあるが、二葉亭、嵯峨の家の兩氏よりも、その作物の發表が早かつたかとさへ思はれるほどである。その文體の口語そのまゝに近いといふ點からいへば、山田氏の方が少々、より新しい試みであつたともいへようと思はれる。ともあれ、明治廿年代のはじめ頃に、あゝいふ殆ど口語ともいふべきやうな文體で物を書きはじめたのを見ては、われ〳〵は山田氏の見識と勇氣とに多大の敬意を表さゞるを得ない。

たゞ外國文模倣であるとのみいつてしまひ得ないことである。あんな文體搖籃時代にあつては、外國文體をそのまゝ移入することさへ、優れたる見識と勇氣とを要することであつた。全く獨創の氣分と熱心とのある人でなければとてもできることではない。すべての開拓者に通有なことではあるが、當時の若き山田氏の新しき文體の創始に對する熱烈な態度をば、吾々は壯なりとせざるを得ない。山田氏の『夏

木立』『花車』『胡蝶』などは當時の文壇のものとしては、確に清新の匂ひの高い文體のものであつたことは疑ひがない。

歴史小説のなかの會話の如きも山田氏としては、可なりの工夫の餘になつたものと思ふ。殊に『胡蝶』のなかの會話だけを古語（むしろ文章語）にしたのなどに至つては、大に才氣ある工夫であつて、この式の第一の試みをなした功績は異議なく山田氏に歸すべきものと思ふのである。

中

山田氏の殊に初期に屬する時代の作物においては、描寫と説明が譬喩などを用ひてあつて、甚だ煩瑣の觀がある。しかし、これは、外國文體を移さうとした山田氏としては、當然の行き方であつて、冥々の裡に、かういふ氣分の感化は後の文壇に波及してをると思ふ。山田氏がどの程度において、外國文學を理解してをられたかはもう今では分らぬことかも知れぬが、歐米先進の文物の敬慕者であつたことは、婦人雜誌『以良都女』の刊行は固より、細微なことながら小説『花車』などのカットを章頭の文字に應用したことなどのうちにさへ明かに窺はれて、吾々に取つては會心のことである。かういふやうに、諸種の點において、山田氏は早き明治文壇でのすぐれたる先覺者であつた。

僕は敢ていふ。日本文壇は、吾々の先輩諸君の歐米崇拜のお蔭さまをもつて、今日の如き大進歩をなし得たのだと確信する。先輩諸君の我を忘れ、おのれを空うしての、歐米に對する渇仰なかりしならば、わが日本文壇は今日に至るも、まだ德川文學からは何ほども進歩もしてゐなかつたらうと思ふ。吾々は山田氏及びその他の先覺者の恩澤を忘れてはならぬ。

山田氏が明治文壇において驥足をのぶるを得なかつたのは、主として、團體の力によることができなかつたためであつたのだと思ふ。山田氏が自から親分たることを好む人であつたか、或はさういふことが嫌ひであつたのか、それは僕の知らぬことであるが、與黨を持たなかつたことが、山田氏の文壇での凋落を早めたことは疑

ひがないと思ふ。

下

いふまでもなく、山田氏の方が硯友社の團體においては、尾崎紅葉氏よりも、聊かではあるが、先輩であつたのであらう。なほ更その點が硯友社内での兩雄並び立たざる形勢を强めたのであらう。しかし、『我樂多文庫』を去つて、間もなく、『都の花』の主筆の如き位置に立つた山田氏は旭日昇天の勢ひがあつたといつても、さう誇張ではなかつたくらゐの華々しさであつたと記憶する。この場合、山田氏にして、一團の主領、即ち後から殆ど澎湃として起り來る新興文學の先頭に立つやうな位置にゐたのであつたら、少くとも自然主義勃興の間際までは、とにかくに、世人の記憶外に脱落してしまふやうな不運には出會はないで濟んだであらう。それは山田氏に人愛がなかつたがためか、或は、山田氏が與黨を持つことを潔よしとしなかつたためなのか、僕はさういふ點に對しては、何も聞いてゐない。

田澤稻舟女史の自殺が傳へられるとともに、その原因が山田氏の責任だといふ物議が生じて、山田氏の文名が一時に衰へてしまつた觀があつたのは、山田氏に取つては甚だしき不運であつた。もうその時分には、紅葉、露伴兩氏の雷名のために、それどころか、天外、柳浪兩氏などの新興文名のためにさへ、山田氏の聲名は殆ど侵蝕されてゐた形であつたので、山田氏に對するこの物議は文壇的には殆ど致命的のものであつた。殊に、この噂は、全く訛傳だといふ說さへあるくらゐなのだから、山田氏に取つては全く不運の事件だといはざるを得ない。

大橋乙羽氏の話では、その當時、博文館へあてゝ、博文館の雜誌から山田氏の原稿をボイコットしようとする投書が何通となく郵送されたといふのである。

この事件を境目にして、明治卅年頃からは、山田氏の文名は下り坂一方といふありさまになつた。

約束の枚數なので、殘念ながら、これで擱筆す。

六角坂の家

――紅葉君の片影――

話が餘り古過ぎるかも知れぬが、もう何うしても四十一年程前のことになるけれども、川上眉山君が小石川の下富坂町に住んでゐたことがある。柳町から西へ傳通院へ向けて歩いて行くと、路が坂の下近くで大凡三筋程に分れる。右端の路は、傳通院の裏の坂下へ廻つて居るし、眞中の路は狹い少し急な坂になつて、たくざう稲荷のところへ上つてから、傳通院の門前へ出る路である。たくざう稲荷は本當はたくざうす稲荷といふのであらう。字は澤藏司稲荷と書くやうである。さて、その稲荷へ上る路の左方、卽ち前に云つた三筋の路の左端の路も直きに小さい坂になる。江戸圖に據ると、六角坂といふのらしい。六角越前守の邸前の坂であるので、さう

名づけたものであらう。川上君の家は、その坂を上り詰めたあたりの右の平家であつた。鳥居斷三といふ辯護士さんの持家であつたのではないかと思ふ。

その家へは僕は隨分度々遊びに行つた。高瀨文淵君が川上君の家にゐた時分である。正月の或る日、年始の積りで川上君を訪ふといふと、僕の聲を聞いて、なかでは、『來た、來た』と云つて、どッと二三人の笑ふ聲がした。入いつて行くと、平田禿木、戸川秋骨兩君が來て居り、その二人が主人の川上君と共に尾崎紅葉君を中心にした形で、心持好く會談して居るのであつた。

尾崎君とは明治二十四年の八月に、酒匂の松濤園で初對面をしたきりであつた。その時から見ると、髪を少し長くして居つたせゐでもあらうが、少しふけたやうに思はれた。達辯な尾崎君は、その時分讀賣新聞社にゐたS君が正月の晴着ができ上つて來るまで、社の二階に泊り込んでゐて、着物ができると知人のところを滿べんなく廻はつて歩いたことをば、面白く話して、一座を笑はせた。松濤園では、僕の方が朝早かつたので、尾崎君には挨拶をせずして、箱根へ立つてしまつたので、そ

のあとのことに就ては、一寸川上君から聞いてゐたけれども、尾崎君にもそのことを聞いてみた。尾崎君の話は次のやうであつた。

尾崎君は朝起きてみると、所持金を盗まれて居る、隣室に怪しい客がゐたのではあるが、何うもその仕業らしくも思はれた。が、その客はもう發足して、宿にはゐなかつた。宿の者に理由を話し、僕の名をも擧げて、證明をさせようとしたのであるが、僕も宿を立つたあとだといふので、何うにもしかたがなかつた。それで、時計をかたに置て、宿を出た。『歸る時なんぞは、騙りの顏を見てやれと云はんばかりに、家ぢう帳場へぞろ〳〵出て來ました。餘まり癪に觸るから、紀行を書いて、そのなかでひどくやつつけてやらうかと思つてゐたんだが、そのうちに、誰かに聞いたものと見え、息子が菓子折を持つて、あやまりに來ました』

尾崎君はさう話した。

尾崎君は濃い岱赭色のズックの小鞄を傍に置いてゐた。今ならば折鞄といふところなのである。戸川君が尾崎君に揮毫を賴んでゐたものと見え、尾崎君は『僕に書けといふのは何ですか』と尋ねた。戸川君がマアメエド・シリイズのマアロオ詩集を出すといふと、尾崎君は、早速書かうと勢ひ好く云つて、鞄のなかから、筆卷を出し、そのなかから、畫筆とも見えるやうな軸の長い長鋒の筆とバンヤに浸した墨の入つて居る銅の墨池を出し、墨に十分に筆をひたすといふと、マアロオ詩集の裏の見返しを開けて、『おめでたいものを書きますぜ』と、會心らしく云つて、

『狼の人喰ひし野も若菜かな』

と、如何にも達筆に書いた。惜しいかな、後にその書は平田君の下宿が火事に會つたので、燒けてしまつたと聞いた。

戸川君はその後尾崎君と度々會つたのであるが、僕は川上君の家でその時會つたきりで、その後遂に一度も尾崎君の顏を見る機會を得ないでしまつた。

川上眉山君はなか〳〵豪酒であつた。何時も酒がなければいかぬといふのではなかつたらうと思ふのだが、飲む時になると、隨分强かつたやうだ。文詞の流麗を以つて永く記憶さるゝ『ふところ日記』のなかなどには酒のことが可なり多く書いて

ある。その時の旅、卽ち、三浦半島の旅へ出たのは、下富坂町の家を疊んでからではないかと思ふのだが、牛込の南山伏町に眉山君が住んだのは、『ふところ日記』の旅の直後であらうと思ふ。家は市ヶ谷小學校の前あたりの路次のなかの物靜かな平家であつた。

年始廻はりといふ風習は今日ではもう先づすたつたと云つていゝ形であるのだが、昔の吾々に取つては、さま〴〵な點で、心持ちの宜しい行事であつた。しかし、知人のところを廻はつて歩くなどといふことは、舊市內ぐらゐの割合に狹い地域のなかに、お互ひが住んでゐた昔に於て、可能なことであつたに過ぎないであらう。

その時分は、吾々の乘り物としては、勿論人力車より外に何もなかつた。しかも、その當時の人力車は、唯雪とか雨とかの時ばかり、幌を下ろし、前を護謨引きの布で包むだけで、並の天氣の時は、何の蓋ひもしないのであつたから、一時間ぐらゐも、さういふ車上で寒風に吹き曝らされるのは隨分苦しかつた。身體ぢう冷え氷つてしまふやうな心持ちがし、齒がガタ〴〵とぶつかるまでに慄へて來るくらゐであつた。馬車に乘るやうな人々を除いては、可なりな金持であつても、幾分か吾々と同じやうに、寒風のなかを蓋ひのない人力車で走らせなければならなかつたのだ。今日では、大衆のためにさへ、電車やバスの如き寒風に惱ませられないで濟む乘物があるのだから、昔とは雲泥の差だと云つて宜しからう。

僕は或る年の正月の二日か三日に、南山伏町の川上君の家へ年始に行つた時には、車の上の寒さのために、全く齒の根も合はぬやうに、慄へあがつてゐた。川上君の家では、會席膳に、正月の料理を五六種ならべて、先づこれでと云つて、並の燗酒を出してくれた。下戸の僕も此の時ばかりは、三盃ほど續けざまに飲んでしまつた。此の時の燗酒は全く有りがたかつた。その時の腹の底から暖まつて來るやうな實に快い感じは今も尙記憶にまざ〴〵と殘つて居るくらゐである。下戸の身ながら、此の時ばかりは酒の有りがたみを、染々と身に覺えたのであつた。けれども、僕は勇氣がないために、今日までも全くの下戸である。

眉山・綠雨・透谷

△

本郷春木町の今の柳島線の電車路へ沿うてゐるあたりが燒けたのは、明治二十三年頃かと思ふのだが、川上眉山君の家もあのあたりにあつて、類燒の厄に逢つたものと見え、その頃の硯友社の關係の雜誌か何かに、巖谷小波氏――その頃は漣山人――の眉山君に與へた火事見舞ひの句の、

『燒けあとによいもの出でよ山根草』

といふのが載つてゐたことを記憶する。

吾々の間で一番早く眉山君を知つたのは平田禿木君であるのだが、眉山君のおとつさんは、春木町の家主だか、差配だかであつたといふことを禿木君から聞いたやうに思ふ。

眉山君は若い時分に生母に離れてしまつたらしく、おとつさんには若い同棲者があつて、それに兄弟が幾人かできてゐたやうに聞いてゐる。

二十八年頃、僕の家へ度々眉山君がたづねて來て呉れた時分、何かの話の序に、

「僕の家の人は、土佐の生れだつたとも云ふんだがね……それに實は僕は何處で生れたのかはつきりしないんでね……」

といやふうなことを云つたのを記憶する。『僕の家の人』といふやうに云つたのを、僕は川上君のおつかさんのことだらうかと思つた。他人の傷みに觸れるべきでないと思つたので、そのおつかさんとは死別だか、生別だか、聞きもしなかつた。

川上君は時々高利貸しに苦しめられてゐるやうな話をしたのだが、何うもそれはおとつさんの爲めに判をついたがためではなかつたらうかといふ氣がする。

そのおとつさんの亡くなつたのは、二十九年の五月頃ではなかつたかと思ふ。一

葉女史の日記『みづの上』の二十九年六月十日のところに、左の如く書いてある。

「門に人のあし音聞え初めぬ、お家にかといふ聲はさながら其人なるに、あな川上ぬしにこそとて座をたてば、平田ぬしも同じく席をはなれて迎ふ……かれこれ共に悔みなどいふに、定まりたるにこそは、さても其後のせはしさよ、淋しなどいふ事かけてもなく、日々夜々にさま〳〵の相談事などいとうるさう、負債のぬしよりせめはたり來るなども多く、やる方なき暇なさなりといひて、さのみは憂はしげもなく打笑ふ……」

僕はその時分、江州の彦根にゐたのだが、眉山君のところへ悔み狀を出すと、その返事にあとの始末に忙殺されて、涙を滾ぼすひまもないといふやうな手紙を貰ったことを覺えてゐる。

「眉山君のおとつさんの後添ひの人は、年も眉山君と幾らもちがはない位で、眉山君と一緒になつてもいゝぐらゐな氣でゐるらしいんで川上君も困まつてゐるだらう」

眉山君と親しい或る人はそんなことを云つてゐた。

その後、僕が眉山君に逢つた時――二十九年の八月頃かと思うのだが――眉山君は次のやうに云つてゐた。

「子どもは僕の方へ引き取つてしまはなければ、教育上のことなど到底向ふではだめなんだから、その話をつけようとしてゐるんだがね、向ふぢやア子どもを手放なせば、僕から當人の生活の資が得られなくなるとでも思ふのか何うしても子どもをこつちへ渡すことを承知しないので、困まつてゐる」

眉山君は異腹の弟たちのことではひどく心を惱ましてゐるらしかつた。

これはずつと後になつて、眉山君が南榎町へ引越してからであつたかと思うのだが、眉山君の家で撞木杖を突いた二十位の青年の歸つて行くところへ行きかゝつたことがあつた。

「僕の弟なんだが、關節炎であの通り脚が惡るくなつてゐる。畫でも習はせてみようと思つてゐるんだがね……。」眉山君はさういふ風にも云つてゐた。

△

眉山君が上富坂の家を疊んで、あの『ふところ日記』の旅へ出たのは、二十九年の秋になつてからだと思ふのだが、あの旅へ出る前に、眉山君は、浦和の本陣であつた星野巴聲氏の家にしばらくゐたのだらう。

三十年の一月末頃であつたかと思ふのだが、戸川秋骨君のところへ、川上君が箱根から電車で遊行を勸めて來たので僕も秋骨君に誘はれて、塔の澤の環翠樓へ行つた。眉山君は江見水陰氏と一緒に泊まつてゐた。一二泊してから、吾々も一所に江見氏の片瀬の家へ行つて、とめて貰らつた。その家は、片瀬川の蛭の上に立つてゐた家で、西の縁側から富士がよく見えた。座敷には、巖谷氏の、

「大山や富士を間に雲の峰」

といふ句の額が懸つてゐた。

翌日は、下の川から小舟を出して、江見氏か江見氏の家にゐた大澤氏――であつたかと思う――かが櫓を操つて、江の島を一と廻はりした。

――その晩であつたか、その前の晩であつたか、明かには覺えてゐないが、川上君は酒を飲みながら、江見氏と東京へ歸ることに就て、相談を始めた。江見氏は眉山君に酒を控へろとしきりに忠告し、その末に、

「君が本氣になつて稼げば、受け合つて月にエイテイにはなるんだから、東京へ歸つて眞劍になり給へ」

さういふ意味のことを云つてゐた。眉山君はもうその時分では一流作家のなかに入つてゐたと云つてよかつた。それが、相當に稼いで、月收たつた八十圓といふ時代であつたのだから、當時の文壇の小規模であつたことは大凡察知することができるであらう。

尤も、その當時では中學校の校長で、年俸千圓位なところはそんなに少くはなかつたし、主任教諭などだと、五、六十圓ぐらゐであつて、一般に給料の金高の低い時代であつたのではあるが、勿論それに準じて物價も安かつた時代には相違ないのだが、それにしても、文筆の收入は幾らもない時代であつたのだ。

△

眉山君がその後東京へ歸つての最初の家は、牛込の南山伏町——今の新宿線の電車路の南側——の一寸と路次を入つたところの家ではなかつたかと思ふ。茶は上富坂時代にも立てゝゐたのであつたから、その時代からかも知れぬが、南山伏町の時には、何處か生花の師匠のところへ通つてゐるらしかつた。

その後で越したのが、矢來の低い方にあつた家であつたらうと思ふ。何うもそれは三十二年頃のことのやうな氣がする。

その後に越したのが、南榎町の家であらう。家も間數があつて、一寸と氣取つた建てかたのものであつたし、第一、庭が可なり廣かつた。眉山君はその家で結婚した。長男はその家で生れたかと思ふ。夫人が惡疽が強くて困まると眉山君が云つてゐたのを記憶する。

その次の眉山君の家は、辨天町——早稲田南町から眞直ぐに辨天町の大通りを突き切つて、東へ坂を上がつて、右側——であつた。此の家には、廣津柳浪氏が前に

住んだことがあり、後には、村山鳥逕君が住んでゐた。川上君がその家にゐたのは、三十七年頃であつたらうかと思ふ。

眉山君が最後の家、天神町へ越したのは三十八年頃であつたらうかと思ふ。その家で眉山君には逢はないでしまつたかと思ふ。尋ねてみたことは二度程あつたが、何時も留守であつた。

富士見町で、眉山君と門下の某氏との酒の席へ出たと、或る藝者が云つてゐたが、それは四十年頃であつたらう。逢つたら、そんな笑話もしようなどゝ思つてゐながら、つい尋ねそこなつてしまつた。

眉山君のなくなつたのを、新聞で見て、驚いたのは、四十一年の五月頃の或る朝であつたかと思ふのだが、或るひは記憶に誤りがあるかも知れない。

△

それからずつと後になつてのことであるが、或る晩、細川風谷がたづねて來た時、眉山君の話が出ると、風谷は、

「川上が死ぬ前に、僕の方が借金なんぞでよつぽど弱はつてゐたんで、これぢやア近々に腹でも切るか、ぶら下がりでもするかより外はないと云うと、自分で死ぬなんてそんな心得違ひがあるかと云つて、川上からひどく意見をされたんだがね、ところが、それから一週間ばかりたつと、僕に意見をした川上の方があの通りにやつてしまつたんだ」と話した。

△

「川上君はある點までは、自分の心を人にうち明けるが、その點から先きへは何うしても人を近づけなかつた人だ」

確か田山花袋君はそんな風に云つたと思ふ。さういふところは、眉山君の一種のプライドから來たものであらう。

紅葉君とのなかもさういふ點で餘りうまく行かなかつたのではないかとも想像せられる。あの世話好きな紅葉君から云へば、すつかりまかせろと出さうであるし、眉山君の方からでは、それは困るとなりさうに思はれる。

三十年頃では、「紅葉に想なし、紅葉の天下は眉山取つて代はれり」といふやうな雜誌の若い記者の評などがあつたので、眉山君も紅葉君とは一寸とうち解け兼ねるやうな破目になつたのではなからうか。

近き頃世を去つた小栗風葉君の口振りなどだと、硯友社の若い人々のなかなどでは、眉山君は餘り尊敬されてゐなかつたやうだ。

△

硯友社の先輩のなかでは、眉山君が一番當時の新しい、若い文學者に近づかうとしてゐたやうに見える。

「川上君なども、舊い殼を破ぶらうと努力してゐるのだが、なか〳〵破ぶれないので煩悶してゐる。」

田山君が三十八年頃かに、島崎君と同席の時に、さういふ意味のことを云つたと思ふ。それは田山君が辨天町に住んでゐた頃のことであつたと記憶する。

眉山君は新しい時代のいぶきに敏感であつたがために、當時の既成作家としての

惱みが多かつたのであらうと思ふ。

△

何にしても、眉山君の文章は美しかつた。「網代木」であつたかと思うが、霧の夜の描寫が評判であつた。「觀音岩」は元よりのこと、その他の多くの短篇にも、美しい、情味に富んだ文字が、隨所に見出されると思ふ。

「ふところ日記」の如き、「弔紅葉詞」の如きは、確に文の軌範となるべき文字であることは疑ひがない。

眉山君の話はこれくらゐにして置て、次ぎには齋藤綠雨のことを書く。

「明治二十二、三年頃なるべし、今おもへばいらぬ雅號も、見やう見眞似にはしくなりて、友なる紫瀾氏の紅露情禪、綠雨醒客とかきて送られしに、前者は其ころ咲盛る花形ともいふべき作家の、頭字一つ宛寄せたるにひとしければ、避けて後者を擇みしは是又住處に因みありければなり。綠雨は若葉のしづくを謂ふとぞ」

これは隨筆「日用帳」中の一節であつて、此所にいふ紫瀾氏は坂崎氏であらうと思うのだが、明かでない。綠雨君の當時の住處は本所綠町の藤堂家別邸内であつた。綠雨がなくなつて三日目位に幸田露伴氏に綠雨の戒名を撰んで貰らつたが、氏はそれが春の朝であつたので、春曉院綠雨醒客として、信士とも居士ともしないで置いては何うかと云つた。吾々は至極結構だと云つて、さうきめてしまつたのだが、寺の僧には吾々の考が十分通じなかつたと見えて、居士がついてしまつたと思ふ。綠雨君の墓は本郷東片町の大圓寺にあつて、高島秋帆の墓も同じ地内にあるであらう。

正直正太夫といふ別號に就ても、綠雨君自身、同じ『日用帳』のなかで、左の如く書いてゐる。

「正直正太夫といふは、古く伊勢音頭の狂言に見えたる役名なること、大方の人の知れる所なり。二十二年の末なりきと覺ゆ、小說八宗といふを出せるとき、わが生國の緣あるにまかせて、ほんの一時の戲れと之を假りしに、後には往來

中に正太夫君など呼懸けられて、オ、と言はんに躊躇はれし事もありしか、曩に或人に答へし如く、吾家の油を粍らして他家の米を作る者よと不圖思ひ浮べしより、喧嘩商賣さらりと廢めにしたれば、今はこの名を掲ぐべき場合の、殆ど絶えたるやうになりぬ」

『小說八宗』と言ふのは、綠雨君の文集『あま蛙』のなかに入つてゐる諷刺文であつて、逍遙、二葉亭、篁村、美妙、紅葉、思軒七氏の筆癖をパロディにして、冷やかしたものである。

△

ところで、此の正太夫の號のことに就ては、『おぼえ帳』のなかに、いろ〳〵可笑しい事實談が表はれてゐる。

「煤掃なればと辭むもきかず、朝より妓樓に推登りて、疊十枚積重ねたる上に大胡坐をかき、こゝへ酒よこせ、肴よこせ、第一は女よこせと喚き立つる人の、やはり正太夫と號し居たるよし、程經てわが知れる役者の話にきゝたり」

「いづれの若旦那かとおもはるゝ人の、藝者幇間を狩催し、意氣揚々、われこそ正太夫なれと殊更名告らるゝを、恰も隣室に在りて晝食をなし居たるわれの、聞くともなくきゝたる時は、冷汗忽ち脊に傳はりて、おのづから身を縮するやうの心地したり、今考ふれば、其人慥かにわれよりは美き衣着け居たりしには相違爲し」

△

綠雨君は伊勢の神戸に生れたのだと聞く。綠雨君の竹馬の友ともいふべき上田萬年氏の記するところでは、綠雨君の生れたのは、慶應三年六月（實は同年十二月三十一日であつたといふ）で、伊勢から兩親につれられて東京へ出て來たのは、明治十年であつたさうだ。又上田氏の記するところに從へば、綠雨君の學校教育は左の如くであつたさうだ。

「始めて本所彌勒寺橋畔にありし土浦藩主土屋侯が設立したる土屋學校に入り、東洋小學に轉じ、暫くして籍を回向院裏の江東小學に移し其卒業を待ずして退

き、後一ッ橋外の東京府第一中學に入り、續きて、内幸町府廳構内にありし第二中學に轉じ、また中途より退學し、後其頃本所にありし明治義塾に入りしも、半年を出でずして之を去り、岸本辰雄、磯部四郎等の設立したる現今の明治大學の前身たる明治法律學校にて法律學を學びたるも、之れ亦業成らずして廢學したり……」

綠雨君には、讓、謙といふ二人の弟さんがあつたのだが、その二人の弟を教育するために、自分の教育は中止しなければならなかつたのだと云つてゐた。上田氏も云つておいでの通り、綠雨君のおとつさんは、醫者であつたが、藤堂家の御隱居附きになつてゐただけで、さう患者などはなかつたので、家は豐かではなかつたらしかつた。

「僕が小さい時分にね、新しく西洋から來るようになつた變つた鉛筆か何かがほしくつて、母にねだつたんだね。母は親のかたみだと云つて、銀の平打を大事にしてゐたんだがね。或る日觀音さまへお參りをした歸りに、鉛筆を買つて來てくれたんだ。だが、行きに挿して出た平打はさしてゐなかつたんだ。平打を賣つて、鉛筆を買つてくれたんだと思ふ。母は月のうちの或るきまつた日に必らず觀音さまへお參りをするのだッたよ」

綠雨君は、そんな話を、或るうすら寒い日の夕闇のなかで、淺草の觀音堂の前で、僕にしたことがある。

△

「夕立や、田をみめぐりの其角堂に永機翁の在りける時、父の入懇なりければ、遊びに來よといはるゝまゝ、われも音づれたり。よみ試みたまへと、かの故人五百題を與へられしも、一句も得作らざりき。さる頃人に强ひられて、覺束なくも呼子鳥、初めて口眞似をなしたるが、俳とは薄元手の小商ひ也、融通を利かす也と例の理にのみ走りて、百はおろか、五十にも滿たで止みたり。いつの年なりしか、『拾錢は貳錢銅貨を五枚かな』、這樣なるわが性には適應(かなへ)るなるべし」

綠雨君はさうは云つて居るものゝ、『あられ酒』のなかの『春一ダース』『のこり

物』『小細工集』『枯菊十句』などに出てゐる俳句を見ると、なか〳〵老手であるやうに思はれる。文才のある人であつたので、俳句でも、和歌でも、本氣にやらうとすればできぬことはなかつたらうと思はれるのだ。

「年十七の比なれば、猶學校に通へりしと覺ゆ、われは永機翁の紹介によりて、魯文翁に面したり。駒牽錢（こまひきぜに）に擬したる印一つ贈られしを用ひこそせざれ今も藏せり。いかなる事を書きしか忘れたれど、携へ行きしわが一文に名を眞猿と署し芳譚と稱する雜誌に出されたり」

眞猿は綠雨君の本名の賢の訓（まさる）から取つた號であらう。駒牽錢の印（いん）は野崎左文君の綠雨の記事（早稻田文學所載）のなかに綠雨の筆蹟と共に載つて居ると思ふ。

△

「名は元かり菰の分けもたゞさず、亂れし本末の闇の礫、甚だあたらぬ字義のまゝを、今は一般に小說と呼慣れたれど、以前はいづれの新聞社にても、單に續きものと稱へしなり。われの初めて之れに筆執りしは、明治十九年一月、住處にちなみて江東みどりと號し、善惡押繪羽子板といふを、今日新聞に出したるときの事なり。引つゞきて二三の新聞紙に雨夜の狐火、杜鵑里初聲、比翼莚鴛鴦毛衣、紅白梅花笠、春寒雪解月などいふを出したるが、何れも所謂お伽草紙、七五づくめの極めて甘たるきものなりしは、已に命題に明かなるべし。はやく手元より取棄てたれば、書きし事柄の一部をさへ、われは全く記憶せざれど、むかしを言はば櫨の一本、面はもみぢすべきに定まれるを、あれのこれのと洗ひ立てのうるさければ、自らこゝに名告り置くものなり」

綠雨君がなくなると、直ぐ吾々は、綠雨全集といふわけには行かぬだらうが、責めて綠雨君の作物で本に纏まつてゐないものでも、此際一冊にして置かうでないかといふ相談をしたのであるが、その時に、前記の續きものゝ話が出ると野崎左文君が、綠雨君の筆になつたものなんだから、それ等の初期の作物でも當時の他の一般のものとは、餘程違つた異色のあるものであつたと云つた。明治の小說史を編む材

料としては、眼を通すべきものだらうと思はれるが、もう今日では、さがし出しようのないものであらう。

綠雨君は『日用帳』のなかで新聞社との關係を次のやうに書いてゐる。

「誰々は元校合方なりきと、よらでもあるべき人の垢をより〳〵噂の世に流れしが、われも最初新聞社に入れる時は、やはり校合に從事したる身分なり。今日新聞といふに二度入りて、二度逐はれたり。自由の燈といふに入りしが、こは改革沙汰の起りて除かれたり。朝日新聞の東京に創まるにあたりて、少しは取立てられしも退きたり。東西新聞の倒れしより、大江氏の下に政論社に在りしが、江湖新聞の倒れしより又も同社にもどりて、末廣氏の大同新聞となる迄居續けぬ。されど他に合併の都合ありて、放たれたり。國會新聞、改進新聞は惰け者なればとて、逐はれたり。二六新報に入り、時論日報に入りしも、われを迎ふるほどの社の、など倒れでは止むべき、共に法の如き最期を遂げぬ。逐はれしといひ、放たれしといふもの、皆わが罪なり、他人の罪にはあらず、決して、他人の罪にはあらず、最早われは新聞社に所緣をもつまじきものに考へ定めて、長らく浪人修行に慣れたりしも、あらぬ望のあゝさて凡夫なりけり。再び動きそめて、萬朝報に入りしに、こゝはわれより退社を申出でたるなれば、逐はれしにはあらざるべし。猶めざまし新聞、讀賣新聞等にも寄書したる事ありて、いかにも渡り者の埒無き末とわれも思へど假りに一切を運といはゞ、運は菅の根の長きも一年を超えず、蘆の葉の短きは二月に足らざる程なれば、われの筆取りし時間を總計するに、まことに僅かなる事なりしなり。十露盤手にせぬ商人の扶持によりて、先つ年迄立ちしわか身をおもへば、變るにをかしき元來空蟬の人の志よな」

綠雨君の二六新報にゐた時に、與謝野寛君、坂本紅蓮洞君が綠雨君と知り合ひになり、萬朝報時代に幸德秋水、田岡嶺雲その他の諸氏と相知るに至つたのだ。

餘まりに綠雨君の書いたまゝを引用し過ぎたやうでもあるが、かうした方が當時の世相などが說明なしに端的に分ると思ふからである。

△

透谷北村門太郎君は小田原の生れであつた。先達て亡くなつた坂本紅蓮洞君などは同じく小田原生れなので、透谷君のことを話す時、門公々々と云つてゐた。透谷君のおぢいさんは可なり名のあつたお醫者であつたといふ。

先年俳人倉橋如虹君が北村家の故宅を買つたといふので、尋ねて行つて見せて貰らつたことがある。それは昔の電車通りの會社――卽ち小田原電車の停車場――へ曲がる手前に、藤棚といふ小停留場があつて、その又少し手前の南側で門口に大きな柳の樹のある茅葺きの古い家であつた。元は何うであつたか知らぬが、僕の見た時には、三間ばかりの家であつて、藥局であつたと說明されてみると、なるほどさうかと思はれるやうな跡が入口の部室に殘つてゐた。夜であつたが、一番廣い八疊程の座敷に坐はつて、倉橋君と話をしてゐると、さアッといふやうな幽な音が聞えて來る。それは、その邊では、井戸の水が湧きこぼれるやうに泉んで來るので、その水を筧で淨手鉢へ引いて來てあつて、それが下の溝へ流れ落ちてゐる音だといふのであつた。但し、此の筧は倉橋君の風流のすさびで作られたもので、前にはなかつたものだらうと思ふ。

此の家も無論十二年の震火で燒けてしまつたであらう。

透谷君の家は、京橋の數寄屋橋外の彌左衞門町の角――橋から銀座の方へ向いて云ふと、四角の銀座寄りの左角――にあつた煙草屋であつた。勿論代はかはつてゐたが、震災の時までは矢張りその家では煙草を賣つてゐた。透谷といふのは、數寄屋を書き換へて音讀したまでの全く無雜作な雅號であつた。雅號には大分そんなのが少くない。現に、戸川秋骨君なども文學界の始め頃には築地に住んでゐるので、捿月と號してゐた。

△

北村君は早稻田がまだ專門學校と云つてゐた時分の政治科の出身であつたやうに聞いてゐる。

妻君は、所謂る三多摩から代議士に出た自由黨の石坂昌孝とかいつた人の娘さん

だと、戸川君は云つてゐた。

『蓬萊曲』といふ長詩――劇詩といつて宜しいもの――が出たのは、明治二十四年頃であつたらうかと思ふ。それはバイロンのマンフレッド張りのところの餘程ある詩であつたやうに思ふ。

透谷君と島崎君とが相知つたのは、明治二十五年ぢうのことであらう。僕は高知へ行つてゐた時、蓬萊曲の作者北村氏に逢つたが、有爲の人だと思うといふやうな手紙を藤村君から貰つたことを記憶してゐる。

藤村君が明治女學校の教師をやめて、旅へ出る時に、自分の後任に北村君を推薦したのだと聞いてゐる。

僕は何處で始めて透谷君に逢つたのか、明には記憶してゐないが、何うも秋骨君の居た秋骨君の伯父さんの原氏の家でではなかつたかと思ふ。

「馬場君などの北村君にお會ひなすつた頃は、北村君のからだが大分弱りだしてゐた時分なんだ。もうあの時分では北村君は少し長く話してゐると正座してゐることができないで、何か物によつかゝるといふ風だッたからね」

藤村君は何時であつたか、そんな話をしたことがあるのだが、成る程、僕の會つた時分には、北村君の風つきにもからだの具合にも、如何にも神經質らしいところが現はれてゐた。後になつて考へると、何うもその時分の北村君の顏つきその他では、神經系統に病ひが生じてゐることが明らかに知れるくらゐになつてゐた。

明治元年か或ひは慶應かの生れで、僕などよりは少し年長でもあり、世間知識も多かるべきであるのに、吾々と話をする時など、ヘンに堅くるしく、さばけないやうに思つたので、或る事情で、透谷君を前記の煙草屋の二階へ尋ねて行つた時など思ひきつてザックバランといふやうな調子で、荒ぽい言葉も使へば、ふざけた言ひ廻はしもして對談したのであつたが、透谷君はあとで戸川君か誰かに、馬場はあんまり輕佻だから忠告しろといふやうなことを云つたさうだ。それは二十六年の晩秋頃のことであつたらう。

北村君が、國府津の手前の前川（まへかは）に住んだのは、矢張りその頃から二十七年の始め

へかけてのことかと思ふ。

北村君の最後に住んだ家は、飯倉の坂上の四つ辻から、芝公園へ入つたところあたりで、今小學校がある邊であつたといふのだが、今はその家はなくなつてゐると、何時か島崎君が云つてゐた。

△

或る若い人が、透谷の創作は何れを見てもうまいと思ふものはないと、云つてゐた。どうせ開拓者の仕事なんだからその精神を買ふより外はない。當時の新興の文學さへまだ初歩の寫實主義のうちに彷徨してゐた時分に、あれだけの詩（心の上の意味）の世界へ飛躍突進しようとしたあがきは確に多とすべきであつた。あの時分では、吾々も同じやうな動きのなかに入つてゐたので、自分たちのまはりで行はれてゐることに就ては、別に感服するといふ氣は起らなかつたのだが、今日になつて、當時のことを回顧すると、或る人々の仕事や作物の本當の意味がずつと明らかに認め得らるゝ。

殊に、民友社の人々の文學に對する功利的觀察に反抗しての論戰は全く目ざましいものであつたと云つて宜しからう。

△

『文學界』の始めの方に載つてゐる北村君の『人生に相渉るとは何の謂ぞ』といふ論文は、山路愛山氏が『賴襄論』のなかで述べた文學功利論ともいふべきものに對する論難であるが、大體論としては、今日も尙生命のある文字である。

「極めて拙劣なる生涯の中に尤も高大なる事業を含むことあり、極めて高大なる事業の中にも尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる內部を語り難し、盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり、爲す所なくして終り事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戰ふ爲めに生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして戰ふべきものあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり。戰ふ時は必らず戰を認めて戰ふなり。筆を以てすると、劍を以てすると戰ふに於て相異ることなし。然れども敵とするものゝ種類によつて戰ふものゝ戰を異にするは其常なり。戰ふものゝ、戰の異なるによつて勝利の趣も亦た異ならざるを得ず。戰士陣に臨みて敵に勝ち、凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし。然れども高大なる戰士は斯の如く勝利を携へて歸らざることあるなり。彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり。空を擊ち虛を狙ひ、空の空なる事業をなして、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものなり。

斯くの如き戰は、文士の好んで戰ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戰に運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり。彼は事業を齎らし歸らんとして戰場に赴かず、必死を期し原頭の露となるを覺悟して家を出るなり。斯の如き戰場に出で、斯の如き戰爭をなすは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。」

かうして引用してみると、此の一節は、透谷君が自分自身の生涯の意義を辯明するために書いて置いたのではないかと思はれる位、今日に於ては讀む者に取つて感慨なき能はざる文字である。

一葉の日記

上

樋口一葉の日記を公刊するといふことがいよ〳〵世間へ發表された。それに就て實否を問ひ合はせられる人があるので、讀賣の紙上を借りて、一葉日記の話を爲る。

日記の原稿は、幸田露伴君の校閲を經て、博文館に廻はり、私の所で始の方百頁位は校了になつてゐる。樋口家と博文館との協定は、二冊から成る一葉全集を出さうといふのだ。日記へ持つて行つて、從來刊行の書簡文範を加へ、それを前篇とし、從來の一葉全集に、未刊の小說斷片及び隨筆を加へて、それを後篇とすることにな

つてゐる。卽ち、一葉の遺稿といふべきものは、日記と、小說斷片と、隨筆とのこの三つなのだが、小說斷片は一葉の文學生活の初期に屬するものばかりなので、唯史的價値があればあるといふ迄に過ぎ無いもので、呼び物は無論日記だ。隨筆もさう大した者では無い。

日記は、明治二十四年四月卽ち一葉二十歲の時から始まつて、二十九年卽ち歿したる年の五六月頃まで〻終はつてゐるが、その間に拔けてゐる處はタントは無い。

さて、さういふ風に連續しては居るが、部分々々で、表題が付いてゐる。初めの方は『若葉かげ』中は『蓬生日記』『若くさ』『道しばの露』『しのぶ草』等末が『水の上日記』若くは『水の上』といつたやうになつてゐるのだ。全體の枚數は今正確には云へ無いが、十行二十字詰の原稿紙に直ほすと大凡六百枚位にはならう乎。尤も、原文は大抵半紙を四ッ折にした小さい帳面に書いてあるのだ。樋口家の人の話に依ると、現存の分は日記の全部では無く、一葉生存時に、自分で鼻紙にしたり、ほぐして、裏へ手習をしたりして、散逸せしめて了つた部分が少しはあるといふのだ。

それで、この日記をその書かれた場所で區分すれば、『若葉かげ』等は本郷菊坂町の大溝の向ふの眞砂町の崖下の家で書かれ、下谷區龍泉寺町卽ち京一の非常門近くの家で書かれた分には何か別に名が付て居り、最後の『水の上日記』は一葉終焉の地――本郷區丸山福山町四番地の家で書かれたのだ。その福山町の家は前と後とに池があつたので、表題をさう付けたのであらう。

間接に聞いた所では、一葉はこの日記を文章の稽古の積りで書いたといふことだ。初めの方は擬古文の體であるが、終りに近づくほど、だん〳〵文體が碎けて、終は一葉の後期の小說にあるやうな文體になつてゐる。

私の氣のせえか知らぬが、どうも初めから文章は旨いやうに思はれる。元より思想は平凡なり、筆付きも覺束なげではあるが、その初心らしい所に一種の體があり、發達すべき才分をほのめかしてゐる所が少なからずあるやうに思はれるのだ。日記は四月十一日に吉田かとり子といふ人の角田川の家へ師匠の中島歌子及び同門の人人と一緒に花見に行く所から筆を起してあるのだが、當時のやうな世のなかでの二十歲の婦人の書いたものとしては、決して輕んずることの出來ぬ筆致なのだ。吉田氏の家の樓上から大學のボオトレースを見るくだりに『みの子の君うらやましげに見居たまひて、かち給はゞさもこそ嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはばさもこそくやしからめと打うめきて笑はれにき』と書いてあるのだが、負けたら口惜しからうといふやうに直ぐ考る所が、一葉の氣質を好く表して居て面白いと思ふ。墨堤の夕景を次のやうに叙して居る。『折しも日かげは西にかたぶきて、夕風少しひやゝかなるに、咲あまりたる花の三つ二つ散みだるゝは小蝶などのまふやうにみえてをかし。醉しれたる人の若き君たちにざれ言などいひかくるぞろうがはしくもいとにくし。やう〳〵日の暮れ行まゝにそれらの人はかげもとゞめずなりにたれば、今は心安しとて花の木かげたちめぐり、おのがじゝざれかはすほどに、いつしか名殘なく暮はてゝ、川の面をみ渡せば水上はしろき衣を引たるやうに霞みて向ひの岸の火かげばかりかすかに見ゆるも哀れなり』二十の婦人の書いたものとしては、確に才筆と云へようでは無いか。

中島門下の秀才田邊龍子君は當時既に小説作家としての文名が高かつた。一葉は生活難から文を賣らうと考へたのであらう、四月の十五日には、知人野々宮孃の紹介で、半井桃水君に逢ひに行つて居る。日記には、斯う書いてある。

『君が住み給ふは海近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。……愛宕下の通りにて何とやらんいへる寄席のうらを行て突當りの左り手がそれなり。……出きませしは妹の君なり。……座敷のうちへと伴れいるに、兄はまだ歸り侍らず今暫く待給ひぬと聞え給ひぬ。……門の外に車のとまるおとのするは歸り給ひしなりけり。やがて服など常のにあらため給ひて出おはしたり。初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならはねば耳ほてり唇かはきていふべき言もおぼえず、のぶべき詞もなくて、ひたぶるに禮をなすのみなりき。よそめいか斗おこなりけんと思ふもはづかし。君はとしの頃卅年にやおはすらん、形姿など取立てしるし置かんもいと無禮なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと良く面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべく覺ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豐にこえ給へばまことに見上る樣になん。……』

その日は、半井氏から小説を書く心得などを聞いて、歸つたが、それから數日經つて、四月廿五日に半井氏は、話し度いことがあるから、神田表神保町の俵屋といふ下宿屋まで來て呉れといふ手紙を一葉に送つた。翌二十六日の日記に依ると、その俵屋といふのは、洽集館といふ勸工場――今の南明倶樂部の南手の所にあつた家だといふのだ。其所のありさまは、次のやうに書いてある。

『小やかなる間幾間かしらず數多かり、うしのいませしは二階下の座しきにて、二間に住居給ふかとみゆるに、簞笥などの並べあるは手廻りたる事よと心には思ひて坐につくほど、君は手紙したゝめ居給へりき。暫し免させ給へとてかき終り給ふ。今日は洋裝にて有りたり。……小説のことに就きてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次はかゝるもの書きみ給へ、おのれかねてより書んの心組み有りしかども暇を得ずして日頃過ぎぬとて、かく〳〵してかくせばをかしからんなど物語り給ふ。それより先に今日はまづ君に聞え置度事ありてとの給ふ。そは何事にか

と問ひ參らすれば、いなとや、餘の事にもあらず、余やいまだ老果たる男子にもあらず、君はた妙齡の女子なるを交際の工合甚だ都合よろしからずと、君眞に迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へばおもて火の樣に成りておのが手の置場も無く唯恥かしさ面おほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案ぜり、それは外ならず、余は君を目して我が舊來の親友同輩の青年と見なして萬の談合を爲すべければ、君は又余を見るに青年の男子なりとせで、同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり。』

その時半井氏は一葉の家の貧困であるのに同情して、いろ〳〵親切に話をした。半井氏自身の來歴をも語つた。一葉は、その日の記を『師がの給ふ所をきけば、吾が家の貧しきは未だ貧しとすべきにもあらず、君の經來り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覺ゆる』といふ言葉で終はつて居る。

半井氏對一葉の交際に就ては、世間で種々の臆測があるやうだから、以下、日記のなかから、半井氏に關する分だけを大凡拾つて見よう。

中

五月の八日には、一葉は桃水氏の宅で、小宮山卽眞居士（こみやまそくしんこじ）に紹介された。同十五日には、半井氏の轉居した麴町平河町の宅を訪ひ、廿七日には、小說の原稿を携さへて再び半井氏を訪ふて居る。六月三日と同十七日に又半井氏を訪ふた。日記は六月の二十三日から七月の十七日までと八月の十一日から九月の十五日までとが缺けてゐる。九月二十六日の所に、斯う書いてある。『國子（一葉の妹）……半井うしのことなどをも聞て來ぬ。いでや猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覺す樣には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝに胸つぶれぬ。我爲には良師にしてかつ信友と君もの給へり、我が一家の秘事をも打明て賴み參らせ後來扶けにならんなどの約も有しをそも僞りなりけんかしらず、誰が誠をかとて打もなげかれぬ』

十月十八日の所には、一葉を半井氏に紹介した野々宮菊子が來て『一昨日より半

井君のもとに遊びてよべ歸りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどといとう打案じての給へりし、參らせ給へよ』と云つた。一葉は之に答へて『みにもかねてより參り寄らまほしく思ひながら、猶なんさはる事ありて、まかでぬを常に心ぐるしくてのみなんある』と云つた。同二十四日の所には『半井孝子（桃水氏の令妹）ぬしが嫁入り給ふいはひもの少しもて行方よろしからめとてなり。さわ明日早朝にと心がまへす。久しく訪ひ奉らざりしうちにさま〴〵あやしきもの語りども多かるを半井君のそをおのれにつゝまんとて苦心し給ふなど聞にも少しほゝゑまれぬ』と書いてある。二十五日には祝物を持て行つたまゝで上らずに歸つた。三十日の所には、

『半井君を訪ふ。……種々込み入りたる話しもあれば、此頃もとめし隱れ家にとの給ふ、伴はれて一丁斗手前なるとあるうら屋に參る。座敷の間數四つ斗あり云々』

とあつて半井氏の話は、

『……君がかく打絶て訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる樣にさかしらする人や侍りけん、身はしら雪の清きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう、かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしがりて某に猶曲事ある樣になん思はるゝもつらし、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をとていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語りまつれるにこそ、……兄弟中の醜聞より御母君などあやふがりてかく引止め給ふにや、其心配なう參らせ給はゞ嬉しからんなどの給ふ』

と書いて、その次に『おのれはさる心にもあらざりしかど笹原はしるみ心なめりかし』と、一葉の評語が加へてある。十一月二十四日に一葉は、桃水氏を隱れ家に訪ふた。二十五年の一月七日に、一葉は半井氏の所へ年始に行つたが、本宅には貸し家札が貼つてあつて、半井氏に用のある人は、其近邊の小田といふ家で問ひ合はせろといふ貼紙があつた。で小田へ行つて聞くと、唯だ地方へ旅行したとばかりで要領を得無かつた。何うも例の隱れ家にでは無いかと、それへ行つて音なつたが、留守のやうであつた。水口の戸の開いて居る所から、家のうちへ入つて見たが、誰も居無かつたので、土產物を板の間に置て歸つた。同十一日には、旅行では無くつて

隱れ家に居るのだといふ、半井氏の端書が一葉の所へとゞいた。二月の三日の所に、『半井うしへばがきを出す、明日參らんとてなり、しばらくにしてうしよりもはがき來る、明日拜顏し度し來駕給はるまじきやとの文躰なり、こはおのれが出したるに先立てさし出したまへるなるべし、かく迄も心合ふことのあやしさよとて一笑す』とある。翌四日には、雪を冒して半井氏を訪ふたが、桃水氏は、まだ眠てゐた。一葉は次の間で、十三時少し過ぎから一時頃まで待つてゐた。半井氏は起きて、雜誌『武藏野』の發行さるゝことを話して、一葉の作を求めた。半井氏手づからしるこを作つて一葉に饗した。四時頃車で送られて九段へと堀端を通つた。『雪の日といふ小說編まばやの腹稿なる』と書いてある。

二月十五日には一葉『武藏野』の原稿――『闇櫻』――を半井氏のもとに持つて行つた。三月七日半井氏を訪ふて『武藏野』同人の意氣壯なことを聞き、『闇櫻』の好評なるよしを聞いた。十八日半井氏初めて一葉を訪ふて、西片町へ轉居の通知をした。二十一日一葉半井氏を訪ふて、自分は實際小說家になれる見込があるだらうか、直言して呉れと、賴んでゐる。半井氏は一葉の生計上に困難なことがあらば應分の助力はするから、何處までも小說を書いて見ろといふやうな意味で答へてゐる。二十三日半井氏を訪ふと、『武藏野』の表題を書て呉れと賴まれてそれを書いた。二十四日一葉半井氏を訪ふて、生活上の補助を依賴したが、半井氏は月末までには必らずと快諾した。廿六日半井氏から、宜いことがあるから來いといふ使が來たので、翌廿七日半井氏を訪ふと、一葉の別著の小說――『別れ霜』――を改進新聞に載せることにしたからといふ話であつた。再訂の必要があると云つて、一葉は原稿を持ち歸つて、其後の數日努力した。廿九日の所には『むさし野廣告出たり何と無く極り惡るし』と書いてあり二三行後に『一日分丈草す（新聞原稿）半井氏のもとへ持參せしは十時なりし、今夜も國子同道』とある。四月六日の記事のあとに、歌が四五首書いてある『みちのくのなき名とりがはくるしきは人ぞきせたるぬれ衣にして』『散ぬればいろなきものを櫻花こひとは何のすがたなるらん』『ゆく水のうきなも何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてぞみん』外二首だ。四月の日記の卷の首に『かまへて人にみ

すべきものならねど、立かへり我むかしを思ふにあやふくも又ものぐるはしきこといと多なる、あやしうも人みなば狂人の所爲とやいふらむ』とある。これは後から書いたものかも知れ無い。四月十八日の所に『午前のうちに片町の大人がり行く、此の日頃惱やみ給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはか〴〵敷は物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ、いでや今日こそは御心取らんとて出たつ』とある。廿一日の所には『午後より大人のもとを訪ふ、むさし野來月分趣向につきてなりけり、畑島君も參り合はされたり……、大人達の趣向の談合いとをもしろし』とある。三十日桃水氏を訪ふてゐるが、半井氏は痔を切斷して病臥してゐた。五月一日、四日、九日、十九日、二十日半井氏を訪ふてゐる。多くは病氣見舞の爲であつた。廿二日の所には『半井うしの性情人物などを聞くに、俄に交際をさへ斷りたくなりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯ることいひもて行かるべき、快方を待てと心に思ふ。……午後より又半井氏病氣を訪ふ、朝鮮より友人兩三名來たりしとかにて此邊亂雜也けり、むのれ行きたる故にや人々は早かへりぬ。其のこと由謂なきにもあらじ』とある。

下

六月七日一葉は島田にゆつて半井氏を訪ふた。『人々めづらしがる。是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合ひ給ふをなどいはれて中々に恥づかし』とあつて、半井氏の言葉を斯う書いてある。『實は君が小說のことよ、さま〴〵に案じもしつるが、到底繪入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやう〳〵に見付けて尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて讀賣などにも筆とられなばとく多かるべし……されど、それも是も我は日かげの身立出て何事かなし得べき、委細畑島にいとよくたのみてそれが知人より賴み込せしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ひては見給はずや……との給ふ、何事のいなかあるべき、いと辱なしといふ』とある。一葉は其足で直ぐ、中島家へ行つた。中島家の老人の祭典で、人が十四五人居たが、一葉の信友伊東夏子が一葉を別室へ呼んで、家の名が惜しくば半井氏と

絶交せよと勸告した。十四日の所が面白い。

『我不圖師の君の前にいざり出ぬ。……聞き參らせ度きことゞもあり……といふに、師の君やをら座を定めて何事の問ぞ、今宵聞かんとの給ふ、半井うしのことはかねて師にも聞かせまつりて、……我心に憚かる處いさゝかもあらず、先かく〳〵しか〳〵に人の申すなむ……或は半井のことに依りてにや侍らん、もとより……我より願ひての交際にもあらず、家の爲身のすぎわひの爲取る筆の力にとこそたのめ、外に何のこともあるならず、さるをか樣に人ごとなどのしげく成るなんいと心苦し、哀師の君の御考案はいかにぞや、……御敎へ給はらまほしといふ、師の君不審氣に我をまもりて、偖は半井といふ人とそもじいまだ行末の約束など契りたるにては無きやとの給ふ。こは何事ぞ行末の約はさて置て我聊かもさる心あるならず、師の君までまさなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨めば、夫は實か〳〵、眞實約束も何もあらぬかと問ひ給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふぞ恨めしく、人目

なくば聲立てゝも泣かまほし、師の君さての給ふ、實はその半井といふ人君のことを世に公けに妻也といひふらすよしさる人より我も聞ぬ、……もし全く其事なきならば交際せぬ方宜かるべしとの給ふに、我一度はあきれもしつ、一度は驚きもしつ、……ひたすら彼の人にくゝつらく……猶よく聞き參らせば、田邊君、田中君なども此事を折々にかたりて……才の際なども高しともなき人なるに、夏子ぬしが行末よいと氣の毒なるものなれなど云ひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立に立たるなりとか、淺ましとも淺まし、明日はとく行て半井へ斷りの手段に及ぶべしなど、師君にも語る、臥床に入れどなどかは寢られん』

とあるのだ。十五日に一葉は半井氏を訪ふた。

『我師の君より敎えられつる樣にことつくろひてもの語りす、師の君のもとに家のうち取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて……今しばらくは、手

傳ひ居らんとす、さすれば……紅葉君のことも何も先へ寄りの事ならずば……其甲斐あるまじく……この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて參りつるなり』

と云つて、小説修業中止のむねを半井氏に告げた。廿二日まで、中島家に泊つて居たが廿二日に家に歸つて、半井氏から借りて居た本を返しかた〳〵半井氏を訪ふて一葉は實際の事情を打ち明した。半井氏の言葉は、

『必竟は我罪かも知れず、先頃野々宮ぬしに物がたりの時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみ兼ねて、お前樣のことしきりにたゝえつ、……よき緯君のお世話したし、我れ何ともして我家を出ることあたふ身ならばお嫌やかしらずしゐても貰ひていたゞき度ものよなど我實はいひたり、夫や是れや取りあつめて世にさま〳〵にいひふらすなるべし』

と書いてある。記事の終りは、

『此人の心かねてより知らぬにもあらねばか樣のこと引出しつる憎くさ限りなけれど又世にさま〳〵に云ひふらしたる友の心もいかにぞや……あれと是れとを比べて見るに、其の僞りに曲てなけれど、猶目の前に心は引かれて、此人のいふこと〳〵に哀に悲しく涙さへこぼれぬ、我ながら心よはしや、かゝるほどに國子迎ひに來る、家にても聊かは疑ひなどするにやあらむ。打ちつれて歸る』

となつてゐる。廿六日

『國子の物がたりに聞けば、廿三日に半井ぬし宅前まで參られし由、折ふし來客ありしかば憚かりてにや立寄りもせで行かれたるなり』

とある。二十三日には一葉まだ中島家に居たのだ。七月十日

『中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方へか轉居されんとする也けり、もの語ることも無くて歸る』

とある。それからは、時々半井氏を對象にしたやうな述懐の歌だの感想が書いてあるのみで、半井氏に逢つた記事は無い。十一月十三日には、其月の二十日に『うもれ木』が田邊龍子君の紹介で雜誌『都の花』に出る筈になつてゐたので、半井氏に

一應挨拶に行かなければ惡るからうといふ母の意見に、一葉は喜んで、半井氏の出してゐた葉茶屋――三崎町――を訪ふた。

『六疊ばかりの處に机おきてゆたかに大人は寄りかゝり居たまへり、ふとあふげばものいはず打笑み給へる嬉しなどはよのつねたゞ胸のみおどりぬ』

『商ひのいと忙はしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立働らきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐるやうなり し人の細々となりぬるに、出入りにつけてものはかなきみづしめ樣のものにさへ客といへばかしら下げ給ふことのいたましき、これをなりはひとすれば身にはつらしとも覺さざめるを見る目はいと佗し』

『人無きを見てつと御身近くさし寄りつゝ、何は置て御目に懸る事のいとはるかなるが口惜うこそ、何事も浮世に申合す人無きやうにて心細さ堪へ難しと云へば……もしこゝに申すことありと思さば、此うら道のいと淋しく人目といふものふつにあらねば此處より立寄り給はんに誰かは見とがめ申べきとさゝやき給ふ、いで

や其忍びたるたぐひを厭へばこそ……と云はまほしけれど申さず來りぬ、何も何も殘したるやうにて別れぬるなり』

などゝある。十二月七日の所には半井氏から、小說『胡沙吹く風』の序歌を求めた。直にかへし認めて、『歌は一首、よからねども林正元（小說の主人公）をよめるなりけり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し』とある。八日『龍田君來給へり……ゆかりある人と思へば何方か憎くかるべき、歸らんといふに、母君菓子をつゝみて兄君にみやげにと出す、龍田君よりは我がよろこばしさ上もなかりき』とある。三十一日『三崎町に半井君の店先を眺めぬ、年わかき女の美しく髮などもかざりて下女には有るまじき振舞は大方大人が妻君なるべしと國子のかたる』とある。二十六年二月十一日『國子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしいと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗みえしと國子の語る』とあつて『みるめなきうらみはおきてよる波のたゞこゝよりぞたちかへらまし』といふ歌がある。

二月二十三日の夜半井氏は『胡沙吹く風』を贈る爲に一葉を訪ふた。

『半井に候へ夜に入りて無禮なれどゝいふに、其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん樣になりて思ひかけず唯夢とのみあきれけり……何事も靄の中にさまよふ樣なり、明ぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露わすれたるひま無く夢うつゝ身をはなれぬ人の……せめては文にても見まほしきをなど人にいはれぬ物をおもへば幾度かどに出で立ちつくし、あらぬ郵便にたばかられて心恥かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覺えず、問ふべき事も忘れて面ほてりのみいと堪へがたし。……ともし火のかげよりかすかに面を仰げば優然としてうち笑みたる面ざし、まことに林正元今こゝに出現したらん樣なり、我が小說『曉月夜』いつのほどにか見給ひけん、こまやかに物がたらる、猶折ふし目とゞめ給ふらん嬉しさいとかなし、……さらばと立つを止め參らせんも中々にて送り出るほどかなしともかなし、嬉しとも憂しともいはんかたぞなき、夢うつゝとも得こそ分たねばいはまほしき事も何もたゞひたすらにものも覺えず』

とあるのだ。此邊には大分文學が入つてゐるやうだ。『胡沙吹く風』に就ては、

『この小說うき世の捨て物にて……もよし、我がため生粹の友これを措て外に何かはあらん、孤燈かげはほそく暗雨まどを打つの夜人しらぬおもひをこまやかに語りてはゞかる所なく、なげきもし悅びもせんはうつせみの世にもとめて得がたき所ぞかし、此夜此書をひもといて曉の鐘ひとり聞けり、引とめん袖ならなくに曉の別れかなしく物をこそ思へ、晝はしばし別れんにこそ』

と書いてある。三月十二日

『わが家は細道一つ隔て上通りの商人どもの勝手とむかひ合ひ居たり、國子耳をとどむれば、かの大人があたりのことにぞ似たる、主人めきたる人二人三人あればいづれが主人なるや分らねど、色しろくたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や、何や知らず面ざしなどさしても美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言云ひつるに、さなまが〳〵しく商人なしかりそとて、其のまゝの價ひに買とりくれたるはわかりし人なりし、家は三崎町の外れにて店がまへ立派なる葉茶屋なりと云ひ居たるよし、かの大人に逢ひはあ

らじなど國子かたるに、忘れぬものを又さらに思ひ出ていと堪がたし。くれ竹のよも君しらじ吹く風のそよぐにつけてさわぐ心は』

それからその直ぐ後に、

『とある夕べ鐘の音を聞きて、まちぬべきものともしらぬ中空になど夕ぐれのかねの淋しき』とある。十五日の末に『入る日の方を眺むれば、かの大人のあたりそこと忍ばれて、うら山し夕ぐれ響く鐘の音の至らぬ方もあらじとおもへば』とある。

今原稿が手許に無いから確には云へ無いが、一葉と半井氏との交通は二十六年三月以後は殆ど絶えてしまつたと云つて宜いやうであつたと思ふ。唯、二十九年になつて、半井氏が齋藤緑雨が一葉を訪ひだしたと聞いて、『緑雨といふ男は油斷のならぬ奴だから』といふ警戒を與へに一葉の所へ行つたことが、日記に出て居るのみだ。一葉は半井氏の意外にふけたのに驚いてゐるやうに書いてあつたと思ふ。

世に傳はつて居る一葉對半井氏の關係は、日記に表はれた所では、上來記する通りだ。一葉の方にも隨分誤解があらうから、一葉が書いたそのまゝの言語態度で實際半井氏があられたことだか、俄には斷ぜられ無い。唯だ此事件は日記のなかの一番艶のある部分のやうに思はれるので、ついながゞゝと書いて了つた。

一葉とのみ云つて何の敬稱をも付ぬのは、文字の節約に外ならぬ。他意は無い。

少し與太のやうだ

一

山崎青雨といふ方の『半井桃水君の死』のなかの樋口一葉に關する記述には、甚だ怪訝に堪へぬふしぐ〳〵がある。

一葉女史の樋口夏子を初めて冊子『武藏野』に紹介したのも君（半井氏）であつた。改進新聞に其作を紹介して近代稀に見る女流作家であると折紙をつけたのも全く君であつた。一葉が君を德として常に其寓居を訪れて敎を乞うてゐたのも蓋し當然の成行であつたに違ひない。

常に○○をつけたのは、僕なんだが、此の『常に』が不審なんだ。何うもこれで見ると、一葉が一生半井氏の敎を乞うたやうに聞える。つまり、その點が僕には不審に覺えられるんだ。

一葉女史が二十四年の春から二十九年の夏までの日記を遺してゐることは、明治文學の知識のある人なら大抵知つてゐるだらうと思ふ。ところで、あの日記の全體の調子から考へて、あの日記にはわざ〳〵虛を書いてゐるやうなところはないと見なければならないんだが、あの日記に大體信を置くとすると、一葉女史が半井氏に師事した卽ち敎を乞うたのは、明治二十四年の四月の半ばから、二十五年の六月の半ば頃までのやうで、その後は友人等（そのなかには吾々ははひつてゐない）の忠告で半井氏とは交際を絕ち、その後は二十七年の春頃から二十九年へかけて僅に四五回ぐらゐ半井氏に會つたのみであることになつてゐる。勿論半井氏の世話で、女史の作品が『武藏野』や『改進新聞』へ出たのは、この交際斷絕以前のことである。これでは、常に半井氏の寓居を訪うて敎を乞うたとは云へないやうに思はれる。山

崎氏の書かれたやうだと、一葉の作中の優れたものが皆半井氏の敎の下に書かれたといふやうに聞えさうなので、その點を明白にして置きたいと思ふ。少くとも明治二十七年の暮あたりから以後の一葉女史は誰の力をも借らずに獨力であれだけのものを書いたものと僕は信ずる。一葉女史の日記『みづの上日記』の六月二十日（二十九年）のところに左の記事がある。

『二十日の夜、更けて半井君來訪、いとめづらしき事よとおもふに、あわたゞしげの車にてさへ參られき、唐突に此のほど齋藤正太夫わがもとを訪ひ候ひき、御宅にまかり出たる由といふ。いかにもこのほどよりおはしまし初ぬ。いと氣味わろき御かたよと笑へば、誠にさにこそ、いと氣味わろき男なればかまへて心ゆるし給ふな、我がもとに來たりて、君が身の上さま〴〵に問ひき、此のほどの世の取沙汰はかく〳〵しかじかこそいへなどいとおほくつゞけけれど、左のみはわすれておもひ出でられず、知らせ給ふ如く我れはうき世の別物になりて、たゞみかん箱製造にのみ日をおくれば、文界の事など更にしり候はず、君がさばかり高名におはすなるをも、かれ綠雨より傳へ聞くまでは夢にもしらで過ぎ候ひき、御筆いたくあがり給へるのよしをかれはいひき、彼れは近々君の事を論じたる一文世に公にするのよし、材料もあらばととはれたれど、我れは更にしらぬ由をこたへぬ、我れと君との上につきてあやしき關係ありしやにいひしかば、こは心得ぬこといかでさる事のあるべき、世人はとまれ君などさへさる事をいふ、何なる心ぞやとなおりしに、いな、君の事はすでに先口なり、こと舊聞に屬す、今更あなぐるべきにも非ずといひき、かくて何を書いで候らんと、いとおぼつかなげにいふ、我れはしば〳〵一葉君をとふ、惡口の種さがしにともおぼし給ふらん、さりながらおもへば種さがしの爲めなりしかもしれずとかれはいひき、いと油斷のなりがたき男よと心づけらる。

萬朝報にて君のこと近々かゝばやと有しかば、同じくはとひきゝ參らせてあやまりなき處をかけかしと我れはいひおきぬ。かしこの社にて不似合のこと、君が事よく書くのよしとて笑ふ。

かたらまほしげの事多げにみえしが、何もふくめたるやうにて又もこそと歸る、いとめづらかなる人のまれ〳〵とひ寄りたる事なからずやはとかたぶかる。』

此れで見ると、一葉の晩年は半井氏とは交際が殆どなかつたと思はざるを得ないではないか。それから、も少し前へ戻つて日記のなかの『しのぶぐさ』（二十八年一月）を見ると、

『三日の朝年禮にとてなから井のうし門までおはしぬ、何事もかざりをすてゝすがたもいたくおとろへ給ひき。

ますかゞみわれもとり出ん見し人はきのふとおもふにおもがはりせる

聞えし美男にて衣裳などいつもきらびやかなりし人なりけるを。』

とある。これでも、此の時分には、一葉女史は半井氏とは會はなくなつてゐたことが推定できると思ふ。しかし一葉女史及びその親族が半井氏の當初の推輓を何時までも感謝してゐたことは事實である。

二

平田禿木、戸川秋骨、僕といふやうな『文學界』の連中が一葉女史と親しくなつたのは、女史が本郷の丸山福山町へ移居した二十七年の春以後のことであつて、その時分には、一葉女史と半井氏との交際は絶えて居たらしいのだから、山崎氏の文中にある左の項の事實が大分怪しくなつて來る。

一葉が度々君（半井氏のこと）の寓居をおとづれることによつて、孤蝶君や秋骨君などから色眼鏡をかけられるのがつらいと云つて、當分は私はお伺ひしない方がいゝでせうと眞顏になつて君に話したこともあつたさうだ。それ程一葉は純な女性であつた。

此れは僕等から見ると、半井氏の話を山崎氏が早飲み込みをして、時代の觀念などは少しもなく、僕等の名を此所へ引き合ひに出したに過ぎないものと思ふ。その時分を明治二十七、八年頃とすれば、一葉女史には少くとも『闇夜』『花ごもり』と

いふやうな辭句に可なり皮肉な調子の出てゐる作品のあつた時代である。あれほどもう考が大人びて來てゐた一葉女史が、僕等の名前まで擧げて、半井氏を度々訪問しがたい理由にする譯はないと思ふ。

一葉女史が半井氏と疎遠になつた事情に就ては一葉女史の日記に可なり詳細なる記述がある。『しのぶぐさ』（明治二十五年）の六月十四日から月末頃までのところを見れば、明白に書いてある。半井氏がその時分の話をしたのを、山崎氏が直接に聞いたか傳聞したかして、宜い加減にその事情の一部へ僕等のことをくつつけてしまつたのであらう。

『雪の散る夕、足袋もはかず、ぐる〳〵と櫛まきにした束ね髪で、一葉は君をおとづれたが……。』

さう山崎氏は書いてゐるが、これは何だか不正確なことのやうに思ふ。雪の日に一葉女史が半井氏を訪うたことは、日記の二月四日（二十五年）のところに可なり長い記述がある。僕は何うもその方を信じたい。

それから、山崎氏は一葉女史が二十六で死んだと書いておいでだが、女史は明治五年の生れだから、歿年の二十九年には二十五であつた譯だ。山崎氏は一葉女史が今生きて居れば、六十二だと云つておいでだが、山崎氏の計算法は一寸合點が行き兼ねる。明治二十九年から今年昭和二年までは三十一年になると思ふ。一葉女史が今生きてゐれば五十六になるわけだ。從つて半井氏のなくなつた年が確に六十七だとするならば、一葉女史とは十二ちがうことになる。さうすると、一葉女史が半井氏を度々訪うた明治二十四、五年には、女が二十、二十一といふ齡で、半井氏の方は三十二、三十三といふ齡であつた筈だ。

三

一葉の文章はどこか垢拔けてゐて、殊に小說の構想や題材が當時のニキビ黨作家の及びもつかぬものであつた。例の綠雨なぞは、どうせ素人娘ではなく茶屋女の果かなぞであらうと思つてゐたら心中の氣持を研究に行く程眞面目な女かと跡

で感心したといふ逸話もある位だ。この作者の筆から『にごりえ』のあの傳法肌の文句がにぢみ出たかと思ふと、誰しも一寸驚くに違ひない。

ひどく揚げ足を取ることになるが、山崎氏の此の記述も何うも首肯し兼ねる。一葉女史の文章がどこか垢拔けてゐたといふのは、女史の作の何時ごろのをいふのであらうか。二十六年以前の作者では、それほど垢拔けてゐたとは云ひがたからうし、二十七年の終頃からの諸作ならば、どこかでなくして、十分垢拔けがしてゐると云つてやつてもよかりさうにも思うんだが何んなものであらう。

次にニキビ黨作家といふのは當時のどういふ連中をさしたものなんであらう。その時分には、今日のやうに同人雜誌といふやうなものゝ殆どない時代であつて、當時の小說作家は、割合ひに筆がこなれてゐて、大抵皆商賣人になつてゐたと思ふし、年齡から云つても、さう年寄りはなかつたのだ。特にニキビ黨と云つて輕蔑すべき連中を記憶しない。山崎氏のこゝに云つておいでの綠雨に關する逸話なるものは、僕は聞いたことはない。一葉の文章を讀んで、綠雨が一葉女史を茶屋女の果てかなんぞと思つたらうとは一寸想像のできないことだ。一葉女史の文章は、最初の作『闇櫻』あたりを見ても、かなり文字の素養のある人の作だとは誰にも分かることだらうと思ふ。當時のやうな女性の間に敎育の行はれてゐなかつた時代に、茶屋女のなかなどからあれだけの文章の書ける婦人がでて來ようとは誰も思ふ氣づかひはない。まして、あれ程批評眼の鋭かつた綠雨が一葉女史の文章を見て、女史の身分に大凡誤まらざる推測を下し得なかつた筈がないと思ふ。知り合ひになるまでは、處女とは思はなかつたかも知れぬが、敎養ある婦人とは思つてゐたらうと思ふ。

僕は一葉女史が半井氏の指導、推輓を受けたといふ話は、一葉女史の日記のことを綠雨から聞くまでは一向に知らなかつた。それを綠雨から聞いたのは、勿論女史歿後のことなんだが、綠雨が女史を知る前、女史のことを綠雨などは何ういふ風に聞いてゐたのかと、綠雨に尋ねてみたが、綠雨は、吾々は何だか半井の關係のある婦人だといふやうに聞いてゐたと答へた。唯それだけで、ほかには何も聞かなかつたが、心中の氣持を人に聞きに行くことが、それ程綠雨を感服させたか何うか、何

だかこの邊も少しそのまゝには受取り兼ねることのやうに思ふ。由來逸話などといふものにはヨタがあり勝である。何うも山崎氏の擧げられた此の逸話には、少しも辛味がない。關係者が綠雨であるだけこのまゝでは頂戴できにくいやうに思ふ。

次には、『にごりえ』の傳法肌の文句だが、一葉女史のそれまでの作を讀んだならそれ程意外には思はないだらう。しかも、所謂る傳法肌の文句なるものは『にごりえ』の一部分にしきや過ぎない。女史の才筆ではあんなところぐらゐは、さう骨は折れなかつたらうと思ふ。

とにもかくにも、吾々が親しく見たり聞たりして來た時代が、今日の若い方々には全く見ぬ世のことになつてしまつたので當時の事柄に對しては、吾々とさういふ若い方々とは、餘程考を異にするのは已むを得ない。唯、吾々の方では、吾々の考をそのまゝ提出して、ご參考に供すればそれで宜しいと思ふ。贅言ある所以である。

「文學界」のこと

雜誌『文學界』に集まつてゐた五六人の者の思想なり作物なりがどういふものであつたか、それらの者共の爲人がどういふものであつたかといふやうなことに就いては島崎藤村君の『春』といふ小說が殆んどそれを書き盡してゐる。その小說の中の靑木といふのが北村透谷であり、岸本といふのが島崎藤村君であり、市川といふのが平田禿木君であり、菅といふのが戸川秋骨君であり、岡見兄弟といふのが星野天知君と同夕影君であり、福富といふのが上田敏君であり、栗田といふのが大野洒竹であり、足立といふのが馬場孤蝶であるといふ風で、中に書いてある事實も先づ全部實際あつたことだと云つて宜からうと思はれる。さうして見ると、『文學界』の

ことを僕が玆で話すのは全く蛇足である譯になるのだが、然し、『春』の方は小說であるのだから、幾らか朧げなところもあるかも知れないと思ふので、玆には事實として話して見ようと思ふ。

ところで、『春』は御承知の通り印象的に書かれたものであるので、あの中に出て來る個人々々の行爲、思想といふやうなものに就いては、『春』の中で書かれなかつたことは大分あるのであつて、それを話せば當時の文學者の謂はゞ裏面的生活に對して好奇心を持つ人々のおなぐさみ丈けには確かになることだと思はれるけれども、これは玆ではやらない。何故それをやらないかといふと、實際の事實といふものは、樣々な人の利害に關係を有つて居るものであるから、それからしてまた、個人の私的生活といふものは何等か已むを得ざる理由あるにあらざれば他人から公にすべきものではないのであるから、それを藝術にでもするのでない限りは、この場合に於て公にすべきものでないと僕は考へるからであるのだ。

『文學界』の第一號（二十六年一月刊行）を僕が見たのは高知市に於てゞあつた。

僕は二十四年の暮に兩親を東京へ遣して置いて僕一人高知市の共立學校といふ英語專門の學校へ敎師に行つて、二十五年の夏休みに東京へ歸つて、それから九月の末位に高知へ行つたのであるが、その夏休みの間は眼病に罹つてゐたので、島崎君にも戸川君にもさう度々は會はなかつたやうに思ふ。島崎君が巖本善治氏の『女學雜誌』の寄稿家でその時あつたことは知つてゐたが、別に島崎君の交友達に就いて聞いたことはなかつた。

ところで、『文學界』第一號は島崎君から僕の手許へ郵送されたか、それとも島崎君自身の手から受取つたかどちらであつたか今確かには覺えてゐない。

二十六年の一月の末か二月の初めであつたか、その時日の記憶は今確かでないが、敎場に出てゐると小使が古藤庵無聲といふ名刺を持つて來て、かういふ人が會ひに來たと僕に言つた。僕は新聞社の人でも來たことかと思つて暫時待つてゐて貰ひたいと小使に言つた。で、それから少し經つて敎場から出て來ようとしてゐると、小使がまたやつて來て、お客樣は甚(ひど)くお急ぎのやうでございますといふのだ。そこで、

一體どんな容子なのかと小使に訊くと、どうも旅をなすつてお出でになつたお方のやうでございますといふのだ。その瞬間に僕の心には、餘程親しい人が訪ねて來て呉れたのではなからうか、思ひもかけぬ人が來たのではなからうか、といふやうな豫覺が生じた。今思へばその時何となく島崎君の名が僕の心の中に微かに閃めいたやうに思ふのであるが、それは今の記憶なので當にならない。で、大急ぎで小使部屋へ行つて見ると、旅裝束の島崎君が居た。僕は豫期したことが當つたやうな感じと意外なことが起つたといふ感じとが妙に雜り合つた心持で島崎君を迎へた。が、島崎君に其處で會つたのは僕にとつては非常に嬉しかつた。高知は僕の故郷である、然し乍ら幼年の時其處を去つた僕に取つては、高知の言葉を殆んど忘れてしまつたやうな僕に取つては、高知は全く旅先であつた。その遠國の旅先で親しい友に會つたのであるから僕は非常に嬉しかつた。僕はその時朔を東京から連れて行つてゐたので、それにいひつけて島崎君を僕の家へ案内させて、それから僕自身は學校の仕事をしまつてから家へ歸つて島崎君とゆつくり話をした。『文學界』のことや

『春』の中にある岸本捨吉君の戀愛の話をきいたのはその時であつた。二十三年以後の島崎君は、非常に沈默な、非常に嚴格な人に見えた。それは島崎君の自己改造に努力せられた時代であつた。女のことなどを話し合つたことのそれ迄一度もなかつた島崎君の口から、戀愛の話を聞くのは僕に取つては甚く意外であつた。僕はその時は既に性慾上の或る經驗は有してゐたのであつたが、島崎君の話したやうな――即ち『春』の中の岸本君のやつたやうな――戀愛をば十分に理解することができなかつた。同情はあつたが、所謂共鳴はなかつた。島崎君は僕の家には精々四五日位しか居なかつた。或る霙の降る日に高知の灣から船に乘つて歸つてしまつた。それから少し後になつて我々の親友某君が、某君自身の戀愛に對して島崎君の同情が足りないといふ不滿を島崎君に訴へた。すると島崎君は『それは誰しも有つ感情なのだ。現に高知の馬場の所へ訪ねて行つたときにも先方は非常に款待して呉れて心持がよかつたが、たゞ自分の戀愛に對しては馬場の同情や理解が足りないやうに思はれたので、たゞそれ丈けが自分には不足であつた。誰でも戀愛に熱中してゐると

きには、他人の同情なり理解なりが足りないやうに思ふものだ』と答へたさうである。が、實際のところ僕は島崎君の戀愛に就いての話には面喰はされたやうな氣持であつた。異つた世界を近々と見せられたのであるが、僕はその世界の人であつたこともなく、又その世界へ突入しようといふ氣もなかつたので、僕の同情は熱中した戀人を慰めるに足りるものでは決してなかつたのだ。僕が島崎君の心持を理解し得る點まで近附き得たのは、それより後のことである。さうして見ると、島崎君は文學者として僕の先輩であると共に、さういふ人情の點に於ても確に僕の先輩であるのだ。

高知の鏡川の岸にあつた僕の家で、早い春の夜、島崎君は物靜かなしかし沈痛な聲で、島崎君自身の文學を本氣にやりだした心持や旅に出た考や自身の人生觀などを詳しく話した。

『春』を見ると、次のやうな青木——北村透谷——の文章が引いてある。

『極めて拙劣なる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる內部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる靈劍を空際に擊つ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙る神の如し。天下斯くの如き英雄あり、爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざる所なり。』

これが北村透谷のみならず島崎君始め其他の文學界同人の考を最も雄辯に說明してゐると思ふ。

高知で島崎君から聞いた話や、其の他の諸君から聞いた話を綜合して見ると、『文學界』の起つた過程は大凡次のやうな風であつたらしい。巖本善治氏が出して居られた『女學雜誌』が次第に耶蘇敎に緣故のある若い文學者の作物を發表する壇場になつて來たのは、明治二十五年頃である。ところで、その年の秋頃からして『女學雜誌』に文藝附錄といふやうなものを附けることにして、そこへ『女學雜誌』關係

の若い文學者に力を盡させようといふ話が出來た。が、巖本氏は宗教家であるのだから、文學者とは――殊に其の『文學界』同人になつたやうな人々とは――大分道德觀も違ふのであつたし、殊にさういふ文學者の連中には、もう既に耶蘇教に對する反對的態度を表明し出してゐた連中さへあつた位であつたのだから、そこで、雙方の爲めに『女學雜誌』とは一向關係のない雜誌を出す方がよからうといふことになつて、愈々二十六年の一月から『文學界』を出すことになつたのであつた、といふことだ。金は星野天知君が出し、編輯は星野夕影君がやることになつた。で、その時の執筆者は、北村透谷、星野天知、古藤庵無聲（島崎藤村）平田禿木といふやうな後來『文學界』の幹部になつた人々に、戸川殘花氏が謂はゞ特別寄稿家のやうな位置に加はつてゐたのであつたやうに記憶する。その時分、島崎君の書いたものは各行十七字になつてゐる戯曲若しくは抒情詩が主なもので、その外に芭蕉の俳文脈を大分取入れた散文が大分あつた。高知で島崎君に會つたときに、島崎君は『十七字にすると漢語が自由に使へるから、かういふ形を始めたのだ』と僕に說明して

呉れたことのあるのを記憶する。

北村透谷は、『文學界』に加はらないうちから可成り作をしてゐたやうである。『蓬萊曲』といふ戯曲のやうなものが既に單行本になつて出てゐたと思ふ。僕が透谷を見た時分には、最う透谷の體が病的になり始めてゐた時分なのだと、何時か島崎君が云つたことがある。それはさうなのであらう、如何にも神經質らしい落着のない人のやうに思はれたのだ。年齡の割には世間的知識の狹い、考の偏つた人のやうに思はれた。妙に角の立つた人のやうな氣がしたのであつた。が、心の弱い人とは見えなかつた。野卑だといふやうなところは決してない人であつた。が、惜しいことに耶蘇教がそれ程ぬけ切つてゐなかつた。けれども、さういふ風に稍や一本調子に見えたところが或る仕事の――或る思想上の仕事の――開拓者としては必要な資格であるかも知れないのだ。

平田禿木君は、その時分はまだ二十一歳位であつたらうと思ふのだが、平田君は却々成熟してゐた。藝術上の技巧に對する鑑賞力の精到なる人であり、一體に趣味

の豐富な人であるのは勿論、人情に對する知識及び考察力が年齢の割には餘程多かつた。今日の平田君は如何にも控目な人になつてしまつて、今は殆んど隱遁的生活を送つてゐるやうな有樣である。けれども、二十六七年の頃の平田君は筆に於ても口に於ても却々の論客であり、警句家であつた。平田君の紅葉露伴兩氏の作物に對する批評などは却々氣の利いた粹(いき)な文章であつて、紅葉が書を寄せて平田君に或る作物の批評を賴んで來たことがある。『春』を見ると、『市川といふ男は西洋料理を食つて反吐を吐いたやうだ――かういふ有難い批評をある大家から頂戴したといつて市川は反りかへつて笑つて……』と書いてあるのだが僕が、誰からか聞いた話では、紅葉が『文學界』の連中は西洋料理と日本料理を一緒に食つて反吐を吐いたやうなものだと云つたといふのである。成程これは當つて居る批評であらう。ところで平田君の所謂反吐は、西洋料理と日本料理が可成り融合してゐたのであるが、島崎君等始め僕等に至る迄もの反吐はその二つの料理が生のまゝで出てゐた趣が確かにあつたらうと思ふ。

『文學界』の創立者達のことに就いては先づそれ丈けにして置いて、その人々の志といふ樣なものを說明する事を試みよう。

『文學界』の創立者等は、兎に角孰(いづ)れかの耶蘇敎の敎會に籍を置いた人々である。その當時の耶蘇敎なるものは可成り新知識の進步主義の人々を集めてゐた。が、しかし、さういふ人々の中心思想は、東西の舊い道德から何程も脫出してゐるのではなかつた。『文學界』の創立者等の志は、さういふ舊い道德から自分等の思想を解放しようといふのに在つた。『文學界』の創立者等の間には『繩墨を脫する』といふ言葉が行はれた。卽ち舊い羈絆を脫する、卽ち習俗を脫するといふ意味だと解して宜からう。

前に引用した透谷の文章の中からも窺ひ得られるが如く、『文學界』の創立者等の志は所謂凡人の思想行爲、卽ち凡人の生活の尊重に在つた。凡人の存在の意義、凡人の尊嚴を主張するに在つた。

『文學界』創立者等の當時文界に對する態度は――其當時の思想界に對する態度

は、その當時文界の權威を成してゐたところの硯友社派及び民友社派の文學に對する反逆の態度であつた。謂はば物質主義に對する精神主義の反抗であつた。洗煉に對する野性の反抗であつた。文界の紳士に對する文界の書生の反抗であつたのだ。言葉を換へて云へば、理知主義に對する感情主義の反抗、客觀主義に對する主觀主義の反抗であつたのだ。

『文學界』の同人は自分等の失戀のことを平氣で書いた。尤もその點では僕と戸川君とが一番罪が深かつたかも知れないが、他の諸君もその點で全然無罪だとは言へなからう。ところで、二十八年頃だと思ふのだが、川上眉山が、尾崎紅葉が『文學界の連中は戀の失敗のことを殆んど誇りがに書いて居るのだが、あれは並の人ならば隱すのが本當であるのに、どうしてあゝいふ風に露骨に書くのであらう。あの連中の心持がどうも解らない』と云つてゐるといふことを僕に話したことがある。『文學界』の連中が露骨に自分等の失戀を告白したのは、前に言つた通りの平凡生活の尊重、客觀主義に對する主觀主義の反抗、洗煉に對する野性の反抗、といふやうな所に根據を有してゐたのだと思ふ。『英雄畢竟馬前の塵である。つはもの共の夢の跡は夏草である。羅馬の城壁は跡なく崩れてしまつた。英雄の事業に何の永遠があらう。戀を索め天地の美を探る凡人の心の方が、夐(はるか)に永遠であり、意義がある』と、島崎君が高知で僕に話したことがあるやうに思ふ。

『文學界』の同人等は當時の思想界の現狀、當時の文界の現狀にはあきたらなかつた。で、彼等はその現狀から脫却しようとした事は前に言つた通りであるが、其脫却しようと思つた當人が矢張り彼等自身の裡に舊い多くのものを有つて居つた。なほその上に、殘念なる哉、彼等は自然主義の開拓者等の如き良い師表を有つてゐなかつた。『ハムレット』と『若きエルテルのわづらひ』とではさう遠くまで行けないことは知れ切つてゐる。彼等は人生にロオマンスを索めた。卽ち彼等の向つた方向は間違つてはゐなかつた。が、到着點を確かに睨んでゐたのではなかつた。『文學界』の創立者等及び『文學界』に可成り關係を有つてゐた人々の中で、出發點から到着點まで少しも疲れずに來た人が二人ある。それは島崎藤村君と田山花袋君であ

る。

ところで、一口に云へば、『文學界』の同人といふことになるのであるが、勿論個人々々に就いて言ふと色々異つたところがあるのは勿論のことである。けれども、茲に極大まかな類別を示してみたいと思ふ。明治四十二三年頃かと思ふのだが、島崎君の淺草新片町の家で、『馬場君とは生れた階級が違ふので、色々相違があるやうに思ふ。馬場君等は上流の階級から出、僕等は下流の階級から出たのでそこに色々面白い相違があると思ふ』といふやうなことを島崎君が僕に言つたやうに覺えてゐる。この大類別法に從つてみると、一寸と面白いことを發見する。卽ち北村透谷、戸川秋骨の兩君へ更に僕を加へ、それを一方に立たせ、島崎藤村君と平田禿木君とを他方に立たせて見るといふと、一方の人々は考が抽象的であり、趣味も粗大であり、萬事大摑みな人々であるが、他方の兩君はそれとはまるで反對で、思想も緻密であり、趣味もこまかく、萬事に精到してゐる。前者は謂はば豫言者肌であるが、後者は何處までも藝術家肌である。北村透谷は行きつまつて斃れたのであるが、性格に於て似寄つた多くを有つてゐたと云はるゝ島崎藤村君は、非常な努力によつて行くべき道を自ら開拓した。これは、この兩君の性情の差にも基くことであらうが、上に言つたやうな類別もその原因を爲してゐないわけはなからうと思はれる。

そこで、その次に來る問題は、『文學界』の創立者等の爲し遂げたところのものがどういふ影響を、その後の思想界及び文學に及ぼしたかといふ問題であるのだが、これは最も手取早くいふとよく分らないといふより外はない。『文學界』の廢刊したのは明治三十年の十二月であるのだが、雜誌はそれ以前よりもその以後に於て弘く讀まれたと信ずべき理由がある。さうして見ると、尠くともその時分の文界には多少の影響を與へたには違ひなからうが、その代り『文學界』の連中それ自身が、明治二十七八年頃の思想界及び文界から樣々の影響をうけたことは事實であるし、また彼等の出現はその時分の靑年の間に勃興しかけてゐた思想の大勢に推されたものと見るのが至當である。卽ち彼等の出現は『時の徵』であつたのだ。で、その後から起つた思想界並びに文界の樣々の運動に『文學界』の出現それ自體がどれ程の貢

獻をしたのであるか、これを定めることは全く不可能である。が、『文學界』同人中の個人々々になると、それは大分異つた話になつて來ると思ふ。吾々は北村透谷、島崎藤村、田山花袋の三君の如きその人の思想、文體技巧等がその後に來れる若き人々の藝術に樣々な直接な影響を與へた人々に敬意を表すべきであらうと思ふ。言ひ度いことは盡きないがこの話は先づこの邊で打切る。そこで、斷つて置くが、この話の中で故人には大抵『君』といふ敬稱をつけなかつた。これはその人々を輕蔑した譯では決してない。たゞかういふ場合の先例に從つたまでである。

それから『文學界』同人のことに就いては、島崎藤村君の『春』が最も良い說明書である。『文學界』同人のことを知らうと思はれる人々は『春』を精讀せられんことを希望する。

昭和十七年十月三十日印刷
昭和十七年十一月十日發行

明治文壇の人々
(出文協承認 あ190226)

著者　馬場孤蝶
發行者　東京市麴町區平河町二ノ一三　和木清三郎
印刷者　東京市芝區濱松町一ノ十三　植田庄助
配給元　東京市神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社
發行所　東京市芝區三田二丁目慶應義塾内　三田文學出版部　會員番號・一三二五〇四
營業所　東京市麴町區平河町二ノ一三　振替・東京・八一六二九番

㊙定價三圓二十錢

當出版部刊行書籍に萬一落丁・亂丁等の不完全な品有之候節は、御申出被下度、早速お取換可申上候。

成文堂印刷（東東 1049）

三田文學出版部刊行書目

學生に與ふ	小泉信三著	B6判四百頁 函入 別染裝	定價 二・五〇〇	送 二〇
王城山莊隨筆	高橋誠一郎著	鈴木信太郎裝 B6判七色刷	定價 二・八〇	送 一五
福澤諭吉襍攷	富田正文著	B6判四三六頁 函入 和紙裝	定價 二・四〇〇	送 二〇
長篇小說 眞珠の胎	間宮茂輔著	福田豐四郎裝 B6判三三〇頁	定價 二・三〇	送 一五
久保田万太郎句集		著者自選句集 別染裝 函入	定價 二・〇〇	送 一五
歌舞伎劇鑑賞	三宅三郎著	鳥居清言裝 B6判四二〇頁	定價 二・二〇〇	送 二〇
長篇小說 眼中の人	小島政二郎著	益田義信裝 B6 三九八頁 函入	定價 二・五〇〇	送 二〇
明治文壇の人々	馬場孤蝶著	木村莊八裝 B6 三六六頁 口繪	定價 三・二〇〇	送 二五
芝居ざんげ	小林一三著	宮田重雄裝 B6判 五九六頁	定價 三・二〇〇	送 二五

910.26
B12a

終